

アレクサンドリアのクレメンス 『パイダゴゴス』（『訓導者』）

第2巻 — 全訳 —

秋 山 学

序

本稿と同時に公にされる『文藝言語研究 文藝篇』には、アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』より第1巻の全訳を掲載した。この同『言語篇』には、それに続く『パイダゴゴス』第2巻について、その全訳を掲げる。続く第3巻についても、この同期間に訳出を進めており、それは人文社会科学研究所古典古代学研究室より年次刊行される『古典古代学』の第3号（25－76頁）に掲載の予定である。こうして2010年度下半期に、ほぼ同時に刊行される本学刊行物を借りてクレメンス『パイダゴゴス』全3巻の全訳を拙文で披露することができるのは大きな喜びである。なお、クレメンスに関しては既出の拙稿「アレクサンドリアのクレメンス『プロトプレティコス』（『ギリシア人への勧告』）—全訳—」（筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57, 1－82, 2010.3）を参照されたい。

I. 食物に関してはいかにあるべきか。

1.1) ではわれわれは、この著作の主題に沿いつつ、聖書から訓導に有用な箇所を抽出し、生涯を通して「キリスト者」と呼ばれるためには、いかなる人間でなければならないかを、章立てにして述べることにしよう。そのため、まずわれわれ自身が、いかにして自らを整えるべきかということから始めねばならない。2) では、隊列の均衡を目指す者たちにとって、われわれの各々が自分の肉体に対してどのようなものを提供すべきか、あるいはむしろ、どのようにその肉体を統御すべきかについて、述べねばならない。すなわち人は、外界の事柄ないしはなお肉体の鍛錬に関わる事柄から、御言葉によって思惟の領域に

導かれるとき、本性上人間に関して生起する事柄を正確に観察することを学び取る。そのとき、彼はもはや外界の事柄に尽力するのではなく、人間に固有の事柄、すなわち靈魂の目を淨め、肉体に関しては聖なるものとすることを知る。

3) というのもそれら外的な事柄とは、そのために人はまだ塵にすぎないわけで、それらから淨められてしまえば、自らにとって、神を把握する道に至るために、他にもっと役立つ事柄が何かありうるだろうか？

4) さて、他の人々は食べるために生きており、それはいうまでもなく、生とは腹を満たすことであるような非理性的な動物と同様である。しかしわれわれに対し、訓導者は生きるために食べるようにと告げている。というのもわれわれにとって生育が仕事ではなく、快樂が目的でもなく、御言葉が不腐敗性へと教導するこの世での滞在のために、自身の養育が認められているからである。

2.1) この養育とは単純で、凝ったものではなく、真理に似つかわしい。単純で飾り気のない子供たちにとって、言わば生きるために相応しいもので、放縱に適わしいものではない。しかるに生きることとは、健康と体力という二つから成り立っていて、それらにはとりわけ、軽めの食糧が相応しく、消化と肉体の軽さに有用なものがよい。それらによって、成長と健康と正当な体力が、不正でも輕薄でも哀れでもないかたちで、ちょうど陸上競技選手のダイエットのように、身につくのである。

2) さて、極端な多種食は唾棄すべきである。それはさまざまな弊害、たとえば肉体上の悪習、胃からの嘔吐を生むからであり、いわば、悪靈による料理術やケーキをめぐる意味のない技巧のために、味覚が姦淫を起こすのである。というのも人々は、放縱のうちに害多き快樂へと墮落させる熱中を養育と呼んでいるからである。3) しかるにデーロス島の医師であるアンティファネスは、数々の病気の一つの理由はこのような食べ物の多種性であると言っている。つまりこれは、さまざまな虚栄心から、真理に対して嫌悪を示す者どもが、健全な料理法を破棄し、海外の食材に凝るせいであるというのである。3.1) わたしにも、そのような病気への憐れみは生じるのであるが、自分の贅沢を吹聴するのを恥じない者どももいる。彼らが珍重するのは、シケリア海峡の海ウナギ、マイアンドロス河口のウナギ、メロス島の子ヤギ、スキアトスのボラ、ペロリスのトリガイ、アビュドスの牡蠣。さらにはリパレのニシン、マンティネイアの燕にも目がない。そればかりでなく、アスクラのビート、メトュムナの蜂の巣、アッティカのヒラメ、ダフネのツグミ、ツバメや干し無花果（そのために取りつかれたペルシア人は、500万人の軍勢を率いてギリシアに遠征した

という)に及ぶ。2) それらに加えて、彼らはファシス島起源の鳥、エジプトのコモンシャコ、メディアのシャコも買い求める。美食家たちは、これらを調味料で味付けしてからつまみとし、舌鼓を打つ。こうして彼らは、大地、深海、計り知れぬ空の広がりがあるものを、自らの飽食のために漁っているのだ。彼らは、貪りを好む好事家で、世界を放縱のために無策にも獵ろうとしているように思われる。彼らは「フライパンでシュッと音を」(テクリデイス断片 11) 響かせ、すり鉢と搗り粉木でそれらすべての生命を、質料から切り離し、まるで火か何かのように食欲にも搗り碎いている。だがそればかりでなく、彼らはこれらの珍味類に対し、火にくべてその滋養をすり減らし、パンのように軽んじてしまっているのだ。つまり食糧に必要な部分を快樂の具とし、非難的に摩り替えているのである。

4.1) 人間にあって、飽食 (lichneia) はとどまるところを知らない。バターケーキから蜜ケーキ、さらにはデザート万般に及び、多種のデザートを見出しては、ありとあらゆる種類の珍味を追い求める。わたしには、そのような人間は「あご」にしか見えない。2) 聖書はこう述べている。〈富者の珍味を欲しがるな。それらは偽りの、恥多き生に属するものだ〉(箴言 23,3)。というのも彼らは食物依存症の人々であり、その食物とは、早晚排泄物となって体外に出される。それに対してわれわれ、天上の食物を追い求める者たちにとっては、天の下にある腹を統御することが必要であり、さらには、この世と親しき部分をも支配すべきなのである。その部分とは、使徒が〈神が滅ぼす〉(1 コリント 6,13) と呼んでいるものであり、それらを彼は、唾棄すべき欲情になぞらえ、呪っているのだから。3) 〈食物は腹のために〉(同上) あり、その食物によって、実に肉的でそれゆえに破滅に至る生が支えられているのである。

もしある人々が、口さがない舌を用いて、愛餐 (agapé) のことを「香りとかスープを発する饗宴」だと敢えて言い、御言葉の美しき救いの業、聖化された愛を、カップやスープ碗でもって、傲慢にもその名を飲み物や食べ物、煙などに貶めるとすれば、それは理解において躓いている。神の告げ知らせを、饗宴と値踏みして蔑んでいるのだ。4) というのも酔宴 (euphrosyné) のような集会を判断してそれを「饗宴」「ランチ」また「宴会」と呼んだところで、それはロゴスに従ってその集まりを然るべく呼んだということになるだろう。だが主は、そのような宴 (hestiasis) のことを「愛餐」とは呼ばなかった。5) 主はおよそ次のように語っている。〈あなたは婚宴に招かれたなら、主賓席に座ってはならない。招かれたときには、末席に腰掛けなさい〉(ルカ 14,6)、また〈ラ

ンチや饗宴を催す際には〉(ルカ 14,10), さらに〈宴会を催す際には、貧者を招待しなさい〉(ルカ 14,13), あるいはどのような形で宴を催すべきかに関しては、〈ある人が大きな宴を催し、多くの人々を招いた〉(ルカ 14,16) と述べている。

5.1) だがわたしは、「饗宴」という表面的には美しい呼び名が、どこから流れ出るかに気づいている。

「喉と、饗宴に常連の狂気から」(作者不詳断片 132)

と喜劇で歌われている。「なぜなら」実際、「幾多のものは多くの者にとって饗宴のため」(ムソウス 18B)。というのも彼らは、神が自らの被造物、すなわち人間を創るに当たり、救いまた喜びのために、食物・飲料を備えたということを学び知ってはいないのだから。2) 実に、肉体は食糧の豪勢さからまったく裨益されるものではない。この点に関しては、まったく逆で、実に廉価な食物を摂っている人々が、極めて力強く健全で高貴である。それは、召使が主人よりも、また農夫がオーナーに比して強壮なのを見れば明らかであろう。また彼らは、力強いばかりではなく、賢慮においても勝る。それは哲学者が富者に勝るのと同様である。なぜなら彼らは理性を食物に譲ったり、理性を快楽に迷わせたりしないからである。3) 一方、愛とは実に天上的な食糧であり、ロゴスによる饗応である。〈愛はすべてを保ち、すべてを忍び、すべてを希望する。愛は決して潰えない〉(1 コリント 13,7 - 8)。〈天の王国においてパンを食する者は幸いである〉(ルカ 14,15)。4) しかるにあらゆる落下の中で最も痛ましいものは、過ちのない愛が、上なる天界より地上に向け、スープのうちに墜とされたことである。わたしが、虚しくされた饗宴のことを考えているとお思いだろうか。主は言われる。〈たとえわたしが、持てる財を捧げ尽くしたとしても、愛がなければ、無に等しい〉(1 コリント 13,2 - 3)。

6.1) 律法と御言葉のすべては、この愛に立脚している。もしあなたの神であり隣人でもある主を愛するなら、この天上的饗宴は天国にあって「宴」(euóchia) と呼ばれる。一方地上的饗宴は「宴会」(deipnon) と呼ばれる。それは聖書から示される通りである。つまり宴会は愛を通してなされるにしても、宴会が「愛」そのものとはならない。愛とは、共同体的 (koinónikos) であり、かつ進んで分かち与える (eumetadotos) 善き思い (eunoia) の徴だからである。2) 使徒はこう言っている。〈われわれの善さが、誹謗の対象とならないようにせよ。神の国は食べ物や飲み物ではなく〉つまり、日々の糧が最良のものと見なされるために一、〈聖霊における正義と平和、そして喜びなのだから〉(ローマ 14.16-17)。この最良のものを食す者は、諸事物のなかで

最高のもの、すなわち神の王国を獲得し、この地上にあって愛の聖なる集い（synélysis）、つまり天上の教会を実現するであろう。

7.1) 愛とは浄らかにして神に相応しい財産であり、分かち合い（metadosis）は愛の業である。智慧はこう語っている。〈思慮とは教養への愛である。しかるに愛とはその掟の遵守である〉（知恵 16,26）。酔宴は、ありとあらゆる種類の食物で構成され、永遠の食物にむけて敷かれた、愛餐に似たような瞬きめいたものを有する。つまり愛餐とは饗宴ではないが、宴は愛に根ざしているのだ。2) 御言葉は語る。〈主よ、あなたが愛された子らをして、実りの収穫が人を育むのではなく、あなたの言葉こそが、あなたに信を置く者どもを守るのだということを学ばせたまえ〉（知恵 16,26）。〈なぜなら義しき者はパンのみで生きるのではないのだから〉（申命 8,3；マタイ 4,4）。

3) だがそれにしても、饗宴は簡素で廉価なものであるべきで、覚醒に相応しく、多彩な食材（poiotes）を誇るようなことがなく、このことを教えるようなものでなければならない。というのも、子供を育むような愛餐は善きものであり、共同体に向けての富める糧、すなわち自足性を有する。自足性とは、正しき分量に計り取られた食糧で構成され、肉体を救いに向けて備え、そこからの余剰物を隣人たちに分かち与えるものだからである。しかるに自足性を標榜しすぎるメニュー（diaita）は人を悪化させ、靈魂を愚鈍にし、肉体を病に罹りやすくするように働くのである。

4) 実に、豪勢な料理をめぐる快楽は、耐え難い罵詈をもたらす。それは飽食、暴食、グルメ、食いしん坊、大食いである。これらの名称に固有のハエやイタチは、追従者、剣闘士、それに「粗野な食客の輩」（ホロス『イリアス』 19.30）である。腹の快楽のために、ある者は理性を、ある者は友愛を、またある者は生きることさえ譲り渡してしまう。彼らは、大食いの獣を父とするその似像の如くに、人間の姿をした獣よろしく、腹ばいになって這い回る。5) 彼らのことを「救いのない輩」（asótoi）と呼んだ最初の人々は、彼らの行く先を巧みにほのめかして言っているようにわたしには思われる。つまりこれは、彼らのことを「救いようのない輩」（asóstoi）と考えていながら、そこから s の字母をひとつ省いているわけである。というのも一体彼らは、皿や調味料に愚かしくも血道をあげ、卑しい気質で地表から生まれ、もう生きる見込みがないかのように束の間の生命を追ひ求める者たちに他ならないではないか。

8.1) 聖霊はイザヤを通じ、愛という名称については秘めて表に出さず、彼らのことを不幸であるとしている。それは宴がロゴスに基づくものではないか

らである。〈彼らは酔宴を催し、牛を屠り羊を殺してこう言った。《食べ、飲もう。われわれは明日死ぬのだから》〉(イザヤ 22,13 - 14)。そして預言者は、そのような放縦を罪であると判断し、こう付言している。〈お前たちのこのような罪は、お前たちが死ぬまで、決して赦されることはない〉。つまり非理性的な死が罪の赦しとなることはなく、救いのための死が罪の報いであると判断しているわけである。智慧も、〈少しの放縦のために酔いに堕ちるな〉(シラ 18,32) と述べている。

3) ここで、いわゆる「偶像に備えられた肉」と呼ばれるものに関しても言及しておかねばならない。これは、心して遠ざけねばならないと告げられているからである。わたしには、それらは汚らわしく忌まわしいものだと思われる。彼らはその血にたかっている。

「死者の亡霊たちが、幽界から立ち上って群がる」

(ホロス『オデュッセイア』 11,37)。

4) 使徒は語っている。〈あなた方には、悪霊と交わる者になって欲しくない〉(1 コリント 10,20)。なぜなら、救われる者と滅び行く者とで、食糧は異なるからである。悪霊は遠ざけねばならない。それは悪霊を恐れるからではない(悪霊には力がないのだから)。ただわれわれの良心が聖であるため、また奉献先である悪霊の忌まわしさのために、われわれが悪霊を嫌悪することによる。さらには、人々がいろいろと想像する際に、危うく脆いかたちでなされることによる。〈彼らの良心は、弱く汚されている。食物がわれわれを神に導くのではない〉(1 コリント 8,7 - 8)。〈なぜなら、口の中に入ってくるものではなく、口から出て行くものが人を汚すからである〉(マタイ 15,11)。9.1) 食糧の自然に基づく使用は、善悪に関係がない。使徒は語る。〈われわれは食べたからといって、何かを得るわけではないし、食べないからといって、何かを失うわけでもない〉(1 コリント 8,8)。だが、神的で霊的な食物に与かるのに相応しいとされた者たちが、〈悪霊の食卓〉(1 コリント 10,21)に交わるのは御言葉に適わしくない。使徒は問う。〈われわれには、食べたり飲んだり、妻たちを連れて歩く権利がまったくないのだろうか〉(1 コリント 9,4 - 5)。だが実際、われわれは快楽を支配することで、欲情を阻止しているのは明らかである。〈ただあなた方の自由な態度が、弱い人々にとって躓きの原因とならないように注意せよ〉(1 コリント 8,9)。

2) われわれは、あたかも道楽者のように、福音に描かれる「富者の息子」(ルカ 15,11)に倣って、父の贈与を消尽することは許されない。むしろ神からの賜物を、支配者のようにしっかりと用いるべきである。というのもわれわれは

食糧に対して、それに隷属するのではなく、統治し、支配するように定められたのであるから(創世1,28)。3) 称賛されるべきは、真理に向かって目を注ぎ、天上なる神的食物に依拠し、真に存在する尽きせぬ神的賜物を己がものとするのである。その際には、確固にして不動、淨らかなる快を味わうことになる。キリストの食物は、そのような愛を受け容れねばならないということを示している。4) 家畜の如くに、肥えた体で死に養われるというのは可笑しく、ロゴスに則らず無益で、人間に適わしくもない。彼らは大地から出た者として、いつでも下の方、地面ばかり向き、テーブルに向かって屈みこみ、大食の生を追求し、束の間の期間だけの食糧のためにこの世の善きものを台無しにし、ただ飲み込むことのみにへつらっている。飲み込むという点から言えば、農夫よりも屠殺者のほうが、彼らにはより貴い存在となっているのだ。だがわれわれは、共同体の交わりを失うことなく、だが習慣の罟を不幸として疑ってかかる必要がある。

10.1) それゆえ稀少の必需食品に与かる者は、その飽食を避けるべきである。そしてもし誰か不信心者がわれわれを招き、われわれがそれに応じようと決めたならば(不法者とは交わらないのが良いことであるが)、使徒はわれわれに、供されるものをすべて食べるように命じ、〈良心に照らして何も断らないように〉(1コリント10,27)と言っている。同様に、市場で売られているものは、あれこれ詮索せずに買うようにと使徒は命じている。2) つまり、総じて食物は何であれ、忌避すべきではなく、そのことに神経質になってはならない。むしろキリスト教徒に相応しく、供されたものには与かるべきである。交際が無害で忌まわしくないように継続され交わりを保つべく、招待主を重んじつつ、供されるものの豪勢さに関しては、これを善悪無記と考え、ご馳走に関しては、ほどなく無に帰すものと軽んじるべきであるというのである。3) 〈食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、食べない人は、食べる人を裁いてはならない〉(ロマ14,3)。すこし進んだ箇所では、彼はこのメッセージの理由を説明してこう述べる。〈食べる人〉とは〈主のために食べ、神に感謝を捧げる人であり、食べない人というのは、主のために食べず、神に感謝を捧げる人〉だというのである(ロマ14,6)。正しき食物とは、感謝の晩餐(エウカリスティア)だからである。そして、常に感謝している人は、決して快樂に囚われることはない。

4) だがもし、われわれが食事をともにする人のある者を徳に向けて誘おうというのであれば、その際には食物の飽食は一層避けなければならない。それは彼らのために、はっきりとした徳の範例を彼ら自身に提示するためであり、

われわれ自身がキリストを範としているからである。使徒は言っている。〈もしそのような食物のことがわたしの兄弟を躓かせるのであれば、わたしは未来永劫、決して肉を口にしない。それはわたしの兄弟を躓かせないためである〉(1コリント8,13)。つまり、少しばかりの自制により、人間を獲得することができるからである。5) 〈わたしたちには、食べたり飲んだりする権利がまったくないのだろうか〉(1コリント9,4)。使徒は語る。〈わたしたちは真理を知っている〉(1テモテ4,3)、〈すなわち、世に偶像など存在せず、ただわれわれの神のみ真に唯一なる方であり、この方を通じてすべてが到来し、また主は一人、イエスである〉(1コリント8,4; 8,6)。だが、使徒はこう続ける。〈あなたの知によって、弱い兄弟が亡びてしまうが、その兄弟のためにもキリストは死んだ。弱い兄弟たちの良心を傷つける者は、キリストに対して罪を犯す〉(1コリント8,11 - 12)。6) このようにして使徒は、われわれのことを気遣って食事を判断し、こう述べている。〈もし兄弟と呼ばれる者で、淫らな者、強欲な者、偶像を礼拝する者が見出されれば、彼らとは交わるな、食事も共にするな〉(1コリント5,11)。つまり、そこでの穢れを慮り、言葉を交わさず食物もともにするな、というのであり、それは〈悪霊の食卓〉(1コリント10,21)を憚るのと同様である。

11.1) そこで〈肉も食べず、酒も飲まないのが良い〉(ロマ14,21)と使徒自身が同意しているが、これはピュタゴラス一派の者も同様である。獣類の肉は一層そうであり、獣類から立ち上る蒸散物が濁りに満ちているために、靈魂に陰を落とすというのである。もし誰か、この見解に与する者があれば、それは罪を犯すのではなく、ただ自制心とともに与すれば良からう。彼らに拘泥するのも、彼らから離反するのも良くない。食物に食欲であってもならない。パウロの声がこう響きを返す。〈食べ物のために神の業を減ぼしてはならない〉(ロマ14,15)。2) というのも御言葉における食事に与かった後で、一般民衆のための宴で供されるものに関して、過度に驚嘆したり讃嘆したりするのは無思慮な者の仕業だからである。さらにずっと思慮の欠けた行為であるのは、いわば従者たちの無自制が付け合せのつまみに伴い、そのつまみの方に視線が吸い寄せられてしまうことである。3) 座席で立ち上がったたり、あたかも蜂の巣の穴から覗くかのように、ほとんど顔を皿に摺り寄せるまでしたり、あるいは蒸散により漂う香りを捉えようとして、何度も息継ぎをしたりすることが、どうして無節操でないことがあろうか。あるいは調味料に両手を浸したり、味わえていない食物について、まるで奪い去られたかのように、節度もなく体裁も顧みず、運ばれてくるまでずっとそちらのほうに手を伸ばしていたりするの、馬

鹿げたことでないことがあるか。4) というのもそのような連中は、その強欲のために、人間よりもむしろ豚や犬に似た様で見ることができからである。彼らは食物をおのが物とすることに必死で、顔のまわりにある血管を充血させ、それでもって両の頬を重くしているかのようである。さらには食欲さのために汗を流し通しで、無節度からぜいぜい息を切らして、腹に入っていない食物を急ぎ息せき切って押し戻す。その様はあたかも、肉を消化のためではなく、路銀として備えて置く者のようである。

ともかく、食料をめぐる無節度は悪であり、とりわけ難詰される。12.1) 実に、美食とは食料の用い方に関する無節度に他ならず、飽食とは喉に関する狂気である。貪食とは、食物に関する無抑制であり、その名が示すとおり、気狂いとは狂った者のことであるから、腹に関する狂気である。2) しかるに宴に心配る者は不正を働いているとして、使徒は批判をしつつこう述べている。〈食事のとき、各々が自分の分をまず食べてしまい、ある者が飢えているかと思えば、ある者は酔っているというありさまである。あなた方は、食べたり飲んだりするための家を持っていないのか。それとも神の教会を軽んじて、持たざる人々を辱めようというのか〉（1 コリント 11,21 – 22）。持てる者たちの間で見さかいなく食べる者は、強欲な者であり、自らを辱めている。双方ともその行為は良くない。なぜなら前者は持たざる人々をがっかりさせ、後者は自らの無節度を持てる人々の間であからさまにしているからである。3) そこで否応なく、赤面する人々と、食事に見さかいなくありつく人々、つまり満腹を知らず十分ということのない者に対して、使徒は決然と、もう一度憤りの声を挙げる。〈だから、わが兄弟たちよ、食事に来る際には、互いを受け入れよ。もし空腹なのであれば、家で食べておくが良い。裁かれるために集まるということがないようにするためである〉（1 コリント 11,33 – 34）。

13.1) かくして、およそ卑しき精神性と、劣悪な気質は避けなければならない。食膳に上されたものは行儀良く取り、手も床机も顎も清潔に保ち、顔の慎ましやかさは崩さずに保ち、飲み込むときにも品を逸してはならない。むしろ手は、きちんと間を置いて引き寄せておくべきである。また、気をつけなければならないのは、食べながら何かものを言うことである。声のみつともなくだらしくなり、ほおばったまま声を出すことになる。舌は食物で圧され、本性的に活力に枷が掛かった状態になり、発音はかすれたようになる。2) だから、同時に食べかつ飲むことは相応しくない。というのも、然るべき時機が調和しない二つの事柄に関して、その時宜を混同することは、無節度の最たるものだ

からである。聖書にはこう記されている。「食べるにせよ、飲むにせよ、すべてを神の栄光のためにしなさい」(1コリント10,31)、つまり目的に適った真のあり方をよく見極めよ、ということである。主も、パンと焼いた魚を祝福することによって(マタイ14,19;ヨハネ21,9)、このことを比喩的に表現されたのだとわたしには思われる。主はこれらの食物で弟子たちを饗応し、乏しい食物をもって素晴らしい範例を示されたのである。

14.1) であるから、主が命じてペトロが獲った魚は、それ自体が簡素にして神の賜物、節度ある食糧であることをほのめかしている。水から上がって義の餌へと向かう者たちには、吝嗇と金銭欲を棄て去ることが命じられる。それはちょうど魚の腹から見つかった硬貨の場合と同様であり(マタイ17,27)、虚栄欲を排するためである。そしてその銀貨を徴税人に供し、皇帝のものは皇帝に返し、神のものを神のためにとって置くためである(マタイ22,21)。2) この銀貨は、他の返済の方法も持ち合わせている。それが知られずにいるというわけではなく、むしろ、完済のための時機として、現在は適切ではないということなのである。付言するだけで十分であろうが、われわれは当座(すでにしばしば行ってきたことであるが)、御言葉に同調しない花を用いながら、目的の達成のために、御言葉によって植えられた花に水をやるために、実りの多い泉から水を引くことが肝要なのである。

3) だがもし〈わたしは、すべての事柄に与かることが許されている。だがすべてが益になるわけではない〉(1コリント10,23)のだとしよう。というのも許されていることすべてを為す者は、早まって許されていないことまで為そうと墮ちるからである。だが義が貪欲から成立することはなく、賢慮が放縦から生じることもありえないのと同様に、キリスト教徒の生き方も、放逸から獲得されることはない。なぜなら真理の食卓は「欲望に飢えたる者」からは遠いからである。4) というのももしすべてが人間のために成ったとしても、すべてを用いることが美しいとは限らないばかりでなく、常に用いるのも良くない。時機も、時間も、方法も、関係も、訓導される者には、有効性の点で少なからぬ影響を与えるものであり、腹に拠る生活(その富は刺激的であり、眼識は鈍く、飽食をめぐる盲目的な余剰だからである)を辞めることは、相応の力を発揮するからである。5) 必要な物に関して飢える者はおらず、いかなる人間も神の眼に入っていないことがない。というのも、鳥も、魚も、総じて理性に与からぬ動物も、育んでいるのは一なる方、神である。それらのうちどの種類とて、食物のことを思い煩うようなものはない。しかるにわれわれは、それらの

動物よりも支配的であるという点で優れ、また賢慮を持つという点で、神により親しい。6) われわれは食べたり飲んだりするために創られたのではなく、むしろ神の認識に至るために成ったのである。御言葉は語る。〈食べ、霊において満たされる人は義しい人。不信仰者の腹は満たされることがない〉（箴言13,25）。彼らの腹は、止むことなき飽食を望むのである。しかるに気前の良さとは、単なる快樂のためではなく、共同体の交わりのためにこそ相応しい。

15.1) それゆえ食物のなかで、われわれが飢えていないときですら食するよう迫るものは、欲求を魅惑するようなものであり、それは避けねばならない。いったい、賢慮ある節度を持てる場合、健全な食料というものが多種存在しないとでもいうのだろうか。根菜、オリーブ、数種のカブ、牛乳、チーズ、季節の果物、それにスープにしない野菜の類である。また、焼いた肉やあぶった肉が必要なら、それらにも与かってよいのである。2) 〈ここに何か食べ物があるか〉と、復活の後、主は弟子たちに尋ねた。〈そこで〉（彼らは主から、節儉を実行することを学んでいたので）、〈弟子たちは主に、焼いた魚を一切れ差し出した。主は彼らの見ている前でそれを食べた〉と、ルカは主が語ったことを伝えている（ルカ24,41－44）。3) これらに加えて、御言葉にしたがって食事を取ろうとする者たちは、甘藷や蜂蜜の類も味わってみる必要があるだろう。なぜなら食物のうちで、これらは火を用いず直ちに用いることのできるものとして、準備が簡単なので最適であり、第二にこれらは、上述のように比較的廉価なのである。4) しかるに、食欲をあおるような食卓にありつき、各自の欲情を肥やす者たちには、大食鬼が取り付いていて、この鬼のことをわたしは「腹神教祖」と呼んで恥じることがない。この鬼は最も悪辣かつ最も破滅に導く悪霊である。これはとりもおさず「腹話術者」と呼ばれるものに似ている。共棲する悪霊（daimón）を担うよりも、幸福（eudaimón）になるほうがはるかに良からう。しかるに幸福とは、徳の実践のなかで検証されるものである。

16.1) 実に、使徒マタイは豆と果実と野草しか用いず、肉は食べなかったという。一方洗礼者ヨハネは、一層自制を実践し、〈イナゴと野蜜を食べていた〉（マタイ3,4）。2) ペトロも豚は食べなかった。『使徒行録』に記されるところでは、彼は〈恍惚として倒れ〉、〈天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅で吊るされて、地上に降りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして「ペトロよ、身を起こし、屠って食べよ」という声がした。だがペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません」。すると、また声が聞こえてきた。

「神が清めた物を、清くないなどと言ってはならない」(使徒 10,10 - 15)。
 3) つまり、われわれにとっても、何を食べ何を用いるかということは善悪無記なのである。〈なぜなら、口に入ってくるものが人を汚すのではなく〉(マタイ 15,11)、無節度による虚しき行使が人を汚すからである。というのも神は、人間を創造されたとき、こう述べている。〈すべてがあなた方の食用となる〉(創世 1,29;9,3)。だが〈愛を伴う青菜の方が、偽りを秘めた子牛よりも良い〉(箴言 9,3)。4) この御言葉は、先に述べた事柄をよく想い起こさせてくれる。すなわち、青菜が愛・愛餐なのではなくて、愛をもって食事を摂るべきだということである。すべてにおいて、中庸の状態というものは善であるが、宴をめぐる準備においても、少なからずそれが当てはまる。行き過ぎは過ちのものであるが、中庸は善である。何事であれ、必要不可欠なものに事欠かないのは、中庸の状態である。なぜなら、本性に従った欲求というものは、自足によって限界づけられているからである。

17.1) さてユダヤ人には、律法を通じ、節儉 (euteleia) が最も価値ある徳と規定されている。というのも訓導者が、彼らに対しモーセを通じてその使用を禁じているものは数多く存在する。その際、訓導者はその理由を付言しているが、霊的なものについてはそれを秘し、肉的なものに関しては明らかにしている。それらは彼らが信じている事柄である。まずある動物は爪が割れていないため、またある動物は食物を反芻しないため、またある動物は、水生類の中で唯一、鱗を持たないためである (レビ 11; 申命 14)。その結果、食物として彼らに適する種としては、実に少数のものしか残されなくなる。2) 一方、食することが認められた動物に関しても、その中で、死体、偶像に捧げられたもの、そして絞め殺されたものは禁じられている。それらに触れることが許されないからである。その珍味を用いる場合、それらを摂取することが避けられないため、逆の方針を提示して、習慣から放縦にいたる道筋を寸断しようというわけである。3) しかるに、しばしば快樂が、人間にとって損害と苦痛をもたらしてきた。その一方で食物の過多が、靈魂のうちに疾病と忘却、無節度を生み出してきた。しかし子供たちの身体に関しては、たとえ食料が不足しようと、背丈は増し、成育するといわれている。なぜなら食料過多が成育の順調さを限定しようとも、成長に向かおうとする霊が阻まれることはないからである。

18.1) ここから、放縦に陥った生を批判しつつ、哲学者の中でも真理の探究に余念のないプラトンは、ヘブライの愛智の瞬きを灯してこう語っている。「この世で〈幸福な生〉と呼ばれているもの、すなわちイタリアやシラクサの食物

で満ち足りた生は、わたしがそれを体験しても、まったく心地よくなかった。わたしは一日に二度満ち足りる生活をし、夜はまったく眠らず、この世での生に伴う限りの事どもを味わい尽くしたのにである。というのも、このような生活からは、天の下に生きる人間の誰一人として、若い頃からこのような暮らしをしていたのでは、賢慮ある者とはなり得ないだろう、たとえ非常に卓抜な天分に恵まれていたとしてもである」（プラトン『第7書簡』326b6-c5）。2）プラトンは、ダビデのことを聞き知っていなかったわけではない。ダビデは、自らの町で聖なる櫃を天幕の真ん中に据え、臣下の民すべてに対して喜宴をふるまい、〈主の前に、イスラエルの兵士、男から女にいたるまで、そのすべてに対して各々に、供え物のパン、ナツメヤシの菓子、干しブドウの菓子を分け与えた〉（サムエル下6,17-19；歴代上16,1-3）。このイスラエルの食料は、十分自足するものであるが、先の異邦の食料は余分であった。3）その食料を口にした者は「節度ある態度を取ろうと配慮することはまったくなく」（プラトン『第7書簡』326b6-c5）、理性を腹に埋め、実に「ロバ魚」と呼ばれる魚にも酷似している。これはアリストテレスが、動物の中で唯一、腹の中に心臓を有していると述べているものである（アリストテレス断片326ロズ）。4）この魚のことを、喜劇作家のエピカルモスは「巨大腹魚」と呼んでいる（*Επι Καμίσου*断片67カイベル）。このような、腹に信を置く者どもにとって、〈彼らの神は腹であり、彼らの栄光は恥ずべきものであり、この世の事柄ばかり思い巡らしている〉（*Φιλιπ* 3,19）。使徒はこのような人々に対しては祝福を与えず、〈彼らの行く末は滅びである〉と述べている。

Ⅱ. 飲み物に関してはいかに振る舞うべきか。

19.1) 使徒（パウロ）は、水ばかり飲むティモテに対し、〈あなたの胃のために、少しばかりぶどう酒を飲みなさい〉（1ティモテ5,23）と述べている。これは、完全に病んで弱っている肉体には、相応しい刺激的な助けを加える必要があるとの意である。2）実に、渴ける者にとって、水は自然にして酒分を含まず、必要な飲み物である。いにしえのヘブライ人に対して、切り立った岩から主が迸り出させ、唯一提供した飲み物であった（出エジプト17,6）。なお荒れ野を彷徨う人々には、自制する必要があったからである。3）その後、聖なる葡萄が、預言の房を発芽させた（イザヤ5,1）。これは放浪から休らいへと導かれた者たちのためのしるし（＝十字架）、偉大なる葡萄の房、われわれのために絞られ

た御言葉、その血が救いのために流されるべく、御言葉が、水と混ぜ合わされることを望んだ葡萄の房の血（ヨハ2,7－9）である。主の血は二つの様相をもつ。一つは彼の肉的な血であり、それによってわれわれは滅びから贖われている（1ペト18－19）。もう一つは霊的な血であり、これによってわれわれはキリスト者となっている。そして〈イエスの血を飲む〉とは、主の不滅性に与かることに他ならない。霊は御言葉の力であり、それは血が肉の力であるのと同じである。

20.1) 類比的に、ぶどう酒は水と混ぜ合わせられ、人間には霊が混ぜられる。前者すなわち混酒は信仰を養い、後者すなわち霊は不滅性へと導く。かくしてこの両者すなわち飲物と御言葉の混合が〈恩寵の祭典〉(eucharistia) と呼ばれる。これは麗しく讃えられるべき恩寵 (charis) である。この祭義に信仰をもって与かる人々は、肉的にも霊的にも聖化される。その人は神的な混酒であり、そこには父の意向が、霊と御言葉へと人間を招き入れるべく神秘的に働いている。というのも実に、霊は、霊によって育まれる靈魂のうちに住むからである。一方肉はロゴスによって治められる。この肉とは〈御言葉が肉となった〉（ヨハ1,14）と言われる場合の肉である。2) かくしてわたくしは、厳しき生を引き受け、水を賢慮のための薬として要求しつつ、いわば火の危険性をはらんだものであるかのように、ぶどう酒をできる限り遠ざけ、避けるようにしている人々を愛する。

3) であるから、少年たち・少女たちは、この薬（酒）からできるだけ離れるようにするのがよい。というのも、沸々とたぎっているような年齢には、最も熱い液体であるぶどう酒を注ぐのは適当ではないからである。まるで火に火を注ぐようなもので、それによって粗野な衝動や欲情が燃え上がるし、熱い性情に火がつく。さらに性急な若者であれば、内側から欲求に対して熱くなる。前もって肉体の上で、それらの弊害を食い止める必要があるのに、適度よりも速く、欲情の蹠が露わになってしまうのである。4) こうして、ぶどう酒がたぎると、臆面もなく激昂し、胸と恥部は膨らみ、裸体像についても触れ回る。こうして肉体が靈魂の傷に火をつけずにはおかなくなり、恥を知らぬ鼓動が言動を行き過ぎにさせ、おしやれについても不法なまでに求める。21.1) ここから、年齢の若さが、羞恥の垣根を越えることになる。そこでできる限り、若者たちの衝動を消すように試みる必要がある。その際には可燃性のもの、つまり威嚇的な狂気を取り除く一方、燃焼を抑える薬剤を注入するのである。この抗剤はすでに膨れ上がっている靈魂を抑制し、膨張している部位も押し留め、す

でに激動している欲情の苛立ちをも沈静化させる。

2) 一方、日が経つに連れて成熟した者たちは、朝食が相応しい年頃に、ただ朝食のみを摂り、およそあらゆる飲み物を控えるべきである。それは彼らの余剰水分が、乾物の摂取により吸収されて飲み込まれるようにするためである。3) というのも、ひっきりなしに唾を吐いたり鼻をかんだり、分泌に努めようとしたりするのは、適量以上の摂取により湿分が身体に過剰に注入されているという、無節度の証しだからである。だがもし喉の渇きが生じるといのであれば、適量の水分でこの情動を抑えるがよい。なぜならあまりに水分が注入されるのは、食料が流されてしまう恐れがあるために適切でないからである。むしろ口にされた物が調合されて吸収され、ある部分は穀物の塊となり、またあるわずかな部分は、分離のために分かれるという具合がよい。22.1) しかるに、特に神的な思考には、酒のため鈍重にならないのが望ましい。喜劇作家によれば、「生の酒は」、思考の量を「無に」とは言わないまでも「微量に強いる」（メナンドロス断片 512 ケレ）。もっとも夕刻に晚餐がある際には時間的に言って、もう真摯な読書が控えているというのでなければ、酒を用いるべきである。2) その時間帯には、夕刻ゆえに大気も比較的涼しくなっており、体の熱が減ってきているために、そこに暖を注入して補うことも必要である。ただその場合であっても、酒は微量にしておくべきである。「怒り酒」にまで及ぶべきではない。

3) だが、もう年齢が進んだ者たちは、楽しく飲み物に与かることが勧められる。彼らは、言わば時間が経って火が枯れ、年齢的に冷めてしまっているので、ぶどう酒を薬用にして、害のないように再点火してやるのである。大概の場合、酩酊による難破に向けて、年長者たちの欲求が膨れ上がることはもうなかろう。4) 彼らはロゴスと時間とによって、言わば錨によるかのように規制を受けており、酩酊によって激化する欲情の嵐を比較的容易にやり過ごすことができるからである。そして彼らは、宴の雰囲気に沿って楽しく歓談することもできよう。しかし、彼らにあっては、飲み物に関しては限度を設け、理性はぶれず、記憶は働き、身体は揺るがぬ程度にすべきであり、酒のために動揺したりすべきではない。この件に関する専門家は、そのような許容状態を「ほろ酔い」と呼んでいる。破滅を来す前にストップをかけるのは美しい。

23.1) さて、わたしの記憶が正確なら、アルトリウス（マルクス・アルトリウス・アスクレピアデス）という人物が『長命について』なる著作の中で、より長寿の生涯を送るためには、食物がほんの湿る程度の酒を摂るべきだと考えている。かくして酒は、単に健康のためだけなら治療薬程度にたしなむのが適

当であり、これはリラックスとリフレッシュが目的だという人にとっても良い。2) なぜなら酒は、まずもって飲む人自身を、飲む前に比して陽気にするし、共に飲む人々に対しては温順に、召使たちには柔和に、友人に対しては紳士的にする。また酔いが廻れば倨傲も失せる。酒はほのかな熱と甘美な香りを持っており、ほどよく調合されれば、消化作用の後のしつこい残滓を熱分で溶かし、鋭く低質の湿分は芳香と混合してしまう。3) かくして次のように語られたのは至言である。〈始めからほどよく飲む酒は、霊と心を陽気にする〉(シ 31,28)。最良なのは、酒をできるだけ多くの水と混ぜ、決して水のように飲もうとせず、酒好きが昂じて酩酊に至るまで麻痺したように飲んだりしないことである。酒も水も、双方とも神によって造られたものであり、その意味で、双方を混合するのは健康のために協働することになる。生とは、不可欠のものと有用なものの両方から成立しているのだから。

24.1) そこで、有用なものである酒についても、不可欠のものである水をできるだけ多く混合すべきである。無節度の酒のために、舌はつかえ、唇は垂れ、眼は焦点が定まらなくなる。酒の量が多すぎると、その様はあたかも、視線が「泳いで」しまっているかのようにになる。そして偽りを口にせざるを得なくなり、万物がぐるぐると回転しているかのように思える。眼前の物すら、どんな様なのか数えることもできなくなってしまう。

「わたしには、太陽が二つ見えるようだ」

(エウピデス『ハッカイ』 918)

と、酩酊に陥ったテーバイの老人(ペンテウス)はつぶやいている。2) 酒の熱さのため、視点が必要以上に動かされてしまい、一つのものの実体が多重に映るわけである。視点が動いても、見ているものが動いても何も違いはない。揺れのために、正確な基体の把握に至り得ない視覚は、この両者から同じ経験に達する。そして足許は流れに乗っているかの如くであり、しゃっくりや吐き気が襲い、たわごとを口にするようになる。3) 悲劇によれば、

「すべて酒に酔った人間は

憤りに屈し、あたまは空虚で、

饞舌にして多弁、

昔しゃべった悪口を、心にもなく聞く」(ソフォクレス断片 929 ラット)。

悲劇以前にも、知恵がこう語っている。〈過度の飲酒は、間違いや躓きとなって増幅する〉(シ 31,29 - 30)。

25.1) それゆえ大方の人々が、祝宴にあってはリラックスすべきであり、ま

じめな仕事は翌朝まで延期すべきだと述べている。だがわたしとしては、とりわけ宴の席にはロゴスを機敏に同伴させるのが良いと考える。盛宴(euóchia)が知らぬ間に酩酊へと堕ちている、というようなことにならぬよう、ロゴスをして、泥酔への道を戒めてもらうためである。2) というのも誰であれ、思慮の確かな者であれば、眠りに就くより前に両目が塞がってしまうのを、良しとはしないだろう。それと同様に、饗宴からロゴスが去ってしまうことを、誰しも正当なこととは思わないし、実行に先立ってロゴスが眠りに就いてしまうのを、誰も良きことだとは思えないだろう。だが、われわれが眠ってしまったのでは、そのロゴスとて自らに親しき者に対してですら、その場から引き離すことはできまい。ロゴスは、眠りの場にも招かれるべきなのである。3) 知恵とは完全なものであり、神的ならびに人間的な事柄に関する知であり、すべてを包容し、人間の群れを見そなわすそのあり方にしたがって、生にあっては技術となり、われわれが生きる限りのすべての場面において、常に自ら固有の業を完遂する。それは「良き生」ということである。4) しかるに盛宴から節度を駆逐してしまう悪しき霊の者どもは、饗宴の場での無礼講を最も幸いなる生と考える。彼らにとって生きるとは、お祭り騒ぎ、酒宴、水浴び、生の酒、便器、レジャー、飲み会に他ならないのである。

26.1) 実際、彼らのうちのある者が、半酩酊状態でふらふらしながら、首に冠を、あたかもアムフォラのように頂き、「友愛」という名のもとに、互いに生のままの酒を吐いているのを目にすることができる。一方ある者は、酔いつぶれたまま、干からびたような様で青ざめ、顔面は土色で、まだ前日の酩酊状態のまま、朝から再び新たな酩酊へと突入する。2) おお友よ、できるだけこの笑止千万であると同時に憐れむべき像から遠ざかり、自ら自身をより優れたあり方に整えることを学び取り、われわれもまた他の人々にとって似たような光景・笑いのネタにならないように注意できれば良きことである。3) 次の言葉は至言であろう。〈かまどの火が鉄を染めて試すように、酒は酩酊において人の心を明らかにする〉(シラ31,26)。酩酊とは、生の酒の行き過ぎた使用であり、深酔い(paroinia)とは、その使用の際の無節度であり、酔いつぶれとは、酩酊による不快感であり、悪心とは頭の鼓動からこう名づけられているものである。

27.1) このような生は(生と呼ばれるべきものであるとすれば)、怠惰であり放縦に突き動かされ、酔いつぶれて揺らぐものであるが、神の知恵はこれを怪しみ、自らの子供たちにこう忠告している。〈大酒飲みになるな。宴の食事、

肉の買い物には手を出すな。すべて酩酊している者、姦通者は飢え、すべて惰眠を貪る者はぼろ衣をまとう(箴言 23,20 - 21)。2) ここで「惰眠を貪る者」とは、すべて知恵に向けて目覚めておらず、酩酊によって眠りへの洗礼を受けた者を指す。そして知恵は、泥酔者はぼろ衣を着て、酩酊のゆえに、覗き見る者たちから辱められる、と言う。3) というのも、罪人の穴とは、快樂への執着により貫通された肉の網のぼろ衣であり、その穴を通じて内側から靈魂の羞恥心、すなわち罪が垣間見られる。この罪のゆえに、至るところ引き裂かれ、幾多の欲情へと腐敗したその網は、容易には救われず、救いから切り離されている。4) かくして知恵は、極めて教訓に満ちた言葉を付け加える。〈誰に災いがあるのか。誰に叫びが拳がるのか。誰に裁きが下るのか。誰に不快なゴシップが降りかかるのか。誰に虚しい破滅が迫るのか〉(箴言 23,29)。御言葉その方を軽蔑し、自らを酩酊にすっかり明け渡す酒好きが、このような言葉による聖書の威嚇において、どれほど完全に破れ去っているか、理解されよう。この威嚇にさらに付言がなされる。〈誰の眼が濁っているのか。酒にうつつを抜かしている連中ではないか。どこに酒があるかと虎視眈々狙っている連中ではないか〉(箴言 23,29 - 30)。5) この時点ですでに、御言葉には酒好きが屍と映っており、屍の徴である濁った眼のゆえに、主の御前には死であることを彼に告げている。なぜなら、真の生命に至る事柄を記憶しないのは、腐敗へと墮ちる道だからである。

28.1) かくして訓導者が、われわれの救いを気遣い、次のように禁令を下しているのももっともである。〈酩酊するまで酒を飲むな〉(レビ 4,15)。何ゆえか、とあなたは尋ねるであろうか。彼は答える。〈そのとき、あなたの口は不正なことばを発し、あなたはあたかも、大海のただ中であって大波にもまれる船頭のようになる〉(箴言 23,33 - 34)。2) ここから着想を得て、ある詩も次のように語っている。

「酒も、火に似た力を有していて、人の内に入るや、
リビュアの海のように高波を起こし、
北風はたまた南風のごとくに、隠れたるものすべてを
明るみに出す、好き勝手しゃべらせるものだから。
酒は酩酊する者にとって畏、
酒は靈魂を欺くもの」(エトステス断片 36 パウル)

といった具合である。3) 難破の危険性が理解されるだろうか。つまり、心は深酒によって洗いざらしにされ、甚だしい泥酔状態は海の威嚇になぞらえられ

る。その威嚇にあっては、身体はあたかも船のごとくに沈み、酒の大波によって高まった無節度の淵へととはまり込む。一方船頭、すなわち人間の理性は、酩酊が昂じるとともに波に弄ばれ、嵐の闇による船酔いのあまり朦朧となり、真理の港を見失い、海底に隠れる岩礁に衝突して自らを難破させ、快樂のうちに破滅を迎える。

29.1) したがって使徒が次のように告げているのももっともである。〈酒に酔って酩酊に陥るな。酒には多くの不品行が潜んでいる〉(エペソ5,18)。これは、酩酊における救いようのなさを、不品行でもってほのめかしたものである。というのも、もし主が婚礼の席上、水を酒に変じたのであれば(ヨハネ2)、それは主が酩酊を命じたのではなく、思慮の水成分、すなわちアダム以来の律法による働き手を活性化させ、全世界をぶどう酒の血で満たし、真理の飲料、つまり旧い律法と新しい御言葉の混酒を、敬神のうちに前もって告知知らされていた時が充溢するに及んで、提供したのである。聖書は、聖なる血を神秘的に象徴化し、酒と名づけている。その一方で、酒から出る滓糟を反駁し、〈酒は懲らしめを知らず、酩酊は彼岸に陥る〉(箴言20,1)と述べている。2) かくして、正当なロゴスに適うあり方としては、冬は寒さのゆえに、震えやすい人々が震えださない程度にまで飲むのが良く、それ以外の季節には内臓の治療のために飲むのが良からう。というのも、食料に関しては飢えない程度、それと同様、飲み物に関しては渴きを癒す程度にまで用いるのが有用であり、その際に酒の罣には十全に警戒すべきである。酒の陥穽は非常に危険だからである。3) そのようにすれば、われわれの靈魂も浄らかで乾燥し、輝くものとなるだろう。「乾いた靈魂は光、もっとも知恵があり、最上である」(ヘラクレイトス断片68 アルカゲイッテ)。そうすれば靈魂は視力を備え、酒の蒸散物により雲のように固着して湿分を帯びることがない。

30.1) だから、キオスの酒が足りないとか、アリウシアの酒(プサルコス1099a; アテナイ1,32F)がない場合でも、問題にするには当たらない。なぜなら渴きとは、ある種の必要性の感情であり、それを満たすために相応の助けを求めるものであり、沸々とたぎる酒は必要ではない。海を越えての酒の移入は、無節度によるもので、欲求がたるんでおり、酩酊をめぐって欲情が昂じ、靈魂が錯乱しているのである。2) というのも、芳香で知られるタソス産の酒や、さっぱりとしたレスボス酒、甘いクレタ酒、甘美なシラクサ酒、エジプトのメンデス酒、ナクソス島産の酒、さらにはイタリアの花の香がするような地酒など、さまざまな種類の名の酒がある。ただ節度ある飲み手にとって、酒は一種類、

唯一なる神の耕作による酒である。3) 生まれ故郷の土地の酒が、どうして欲求を満たすに十分でないはずがあろうか。思慮の欠けた王たちが（ヘロドトス『歴史』1,188）、コアスペス川の水を運んだようには（コアスペスとはインドの川で、その水が飲料用には最上だと言われている）、水が供されずとも、友人と同じように、水ももたらされるものである。4) この点に関しても聖霊は、放縦へと向かう富者たちを不幸だとして、アモスを通じてこう叫ばせている。〈蒸留酒を飲み、象牙の寝台に座る者は怠惰である〉（アモス6,6；6,4）。預言者はこれに続く部分をも、非難の口調で付言している。

31.1) さて、とりわけ心がけねばならないのは、相応しい物腰（euschémōsyné）ということである（神話でも、アテナが一彼女がどういう存在であったのかはさておき一、見た目が見苦しいからというので、笛を吹く楽しみを棄てるよう努めたと伝えられている；アポロドーロス『ギリシア神話』1.4.2）。たとえば、生真面目すぎる顔で飲んだり、あまりに引きつった顔をしたり、また飲む前から眼つきを敢えてみっともなくしたり、顎を濡らさぬよう、あるいは服を汚さぬようにというので口を開けたまま力なく吸い込んだり、飲み物すべてを一気に注いだり、自分の顔を杯でほとんど洗わんばかりに埋めたりするのは禁物である。2) というのも飲み物が激しい勢いをつけて運ばれてきてガチャンという音がし、まるで陶器のコップに注がれるような音をたて、これを激しい音とともに喉で響かせて飲むのは、なんとも恥ずかしい。また無節度の光景は似つかわしくなく、さらには参加者の執着、つまり酒好みは有害である。3) おお友よ、このような災いに至るまで逸ることなかれ。あなたの飲み物が奪い去られるわけではないのだ。あなたには与えられるだけでなく、飲み物があなたを待っているのだ。また、大口を開けて飲み、羽目を外すまでに逸るようなことはするな。たとえゆっくり飲んでもあなたの渇きは癒されよう。飲み物が粛々と分かち与えられる間に、粛々と受け取ればよい。というのも、無節度が焦って手にしたものは、時間が経っても奪い取られはしないのだから。知恵はこう語っている。〈酒で男っぶりを上げようとするな。酒は多くの者を台無しにしてきた〉（シラ31,25）。

32.1) 「酩酊に陥るのは、とりわけスキュティア人、ケルト人、イベリア人、トラキア人。どれもみな好戦的な民族ばかりだ。彼らは美しく幸福な事柄を追求していると考えている」（プラトン『法律』1.637d6-e5）。しかるにわれわれ平和的な部族は、倨傲のためではなく享受のために、饗応されても友愛のしらふを飲むのである。それは友愛が、その名に真に相応しく示されるためである。2)

あなたがたは、主がわれわれのために人となられたとき、どのような飲み方をされたと考えるだろうか。あなた方のように羞恥心なく飲んだというのだろうか。上品に、節度をもって、理性的に、ではないだろうか。あなた方もよく知っているように、主ご自身も酒をたしなんだ。主も人間であったからだ。そして主は実際、酒を祝福して言われた。〈取りて、飲め。これはわたしの血である〉（マタイ 26,26 – 28）。ブドウ酒の血とは、〈多くの人のため、罪の赦しのために注がれる〉御言葉である。これは喜悅の聖なる流れを寓意的に表現したものである。3) また、飲み手が節度を持っていなければならないということに関しては、主が宴の場で教えられた事柄を通じて、明白に示されている。主は酩酊のうちに教えたのではなかった。また、祝福されたものが酒であったということを、主は再び弟子たちに向かってこう語って示している。〈わたしはこのブドウの実りを、わたしの父の王国であなた方とともに飲むまでは、決して飲むことはしない〉（マタイ 26,29）。4) だが、ブドウ酒とは主の前で飲むものであるということについては、再度自らに関して、ユダヤ人たちの心の頑なさを非難しつつこう述べている。主は語る。〈人の子が来て、飲み食いする。すると人々は言う。「見ろ、大食漢で大酒のみだ。徴税人や罪人の仲間だ」〉（マタイ 11,19；ルカ 7,34）。33.1) この件をめぐるのは、拙著『禁欲主義者たち』と呼ばれる者たちを駁す』において展開することになろう。

一方女性に関しては、いちおう物腰は上品に、平たいカップにあわせて唇を広げ、口を広く開けるために不恰好になったりしないように、細いアラバストロを口に当て、ふざけて身を崩しながら、頭はやや傾け、うなじを露わにしながら、わたしが思うにかえって下品に飲んでいる。そして彼女らは飲む際に喉を伸ばして飲み込むが、その様はいわば、臨席者たちにできる限り肌を見せようとするかのようだ。さらに男みたいに、否むしろ奴隷みたいにげっぷを飲み込み、贅を尽くしながら一層だらしく飲んでいる。2) というのも理性的な男性に固有の非難というものはありません、むしろそれは女性に当てはまり、自分が一体どういう女性であるのか、自ら認識すれば、それだけで羞恥の念が湧いてもこよう。聖書はこう語る。〈酩酊に陥る妻は、夫の大いなる憤りのもと〉（シラ 26,8）。つまり、好色な女性は神の怒りに当たるとするのである。それは何故だろうか。〈夫は、彼女の不品行を覆わないから〉。つまり、たとえ一度でも快楽への選択をしてしまったなら、女性は速やかに無規律へと身を持ち崩すのである。3) もちろん、アラバストロで飲むことをわれわれが禁じているわけではない。ただ、それだけに熱中することは、傲岸な飲み方だとして拒否し

ているのである。われわれとしては、何であれ手持ちのものを執着心なく用いるように勧め、彼女たちに秘かに忍び寄ってくる欲情を、遠くで事前にシャットアウトするのがよいと考える。4) げっぷをしたくなった場合には、空気の引きつりを静かに吐き出すべきである。女性にあっては、いかなるやり方にせよ、体の一部を露わにした姿を見せることは勧められない。それは男性をも女性をも躓かせないためであり、男性は刺激されてもっと見たいと思わないように、女性も男性の視線を自分に引き寄せたいと思わないようにするためである。5) われわれは常に、主がそばにいらっしゃるかのように慎ましやかに振舞うべきである。使徒はコリントの人々に対し、〈あなた方がともに集っても、主の晩餐を食べることはできない〉(1コリント11,20)と激昂して語ったが、同じことをわれわれにも言われぬようにするためである。

34.1) さて、数学者たちの間でアケファロスと呼ばれるものがある。これは、惑星よりも前に数えられるものであるが、頭を胸に向けて折り曲げており、わたしには、グルメ、快樂主義者、あるいは酩酊に身を委ねる者をほのめかしているように思われる。というのも、この者どもにあっては、理性の座は、頭ではなく、はらわたのうちに位置し、情動と欲情、欲求に隷属しているからである。2) その結果、ちょうどエルペーノールが酩酊に陥ったために、「脊椎骨が砕けた」(ホロス『テュッセル』10.560)のと同じように、この者どもの脳髄も、酩酊のために目まいがし、上から肝臓へそして心臓へ、つまり快樂と欲望の座へと墜落している。この墜落は、詩人の徒らが、ヘファイストスがゼウスによって、天から地へとまっさかさまに投げ落とされたと言っているのよりも大きなものである。3) 聖書はこう語る。〈食い意地の張った者には、不眠・吐き気・腹痛の苦しみが伴う〉(シラ31,20)。それゆえノアの酔業も書き留められている。これは、可能な限りわれわれも酩酊を警戒し、身の墜落の像を明確かつ書き記された形で抱き、この像を通して酩酊の不品行を覆って、主において祝福を受けるためである。5) 聖書はこれらすべてを総括し、非常に簡潔に、ひと言でこう述べている。〈訓導を受けた人間には酒は十分。彼は自分の寝台で安らかに眠る〉(シラ31,19)。

Ⅲ. 調度の華美に熱を上げるべきではないこと。

35.1) さて、銀や金でできた杯や、他の象嵌細工の使用は相応しくない。視覚を欺くためだけのものである。というのも、もし何か熱い飲料をそれらに注ぐ

なら、それらの器は熱くなり、触るのも億劫である。一方、それらに冷たい飲料を注ぐなら、その材質が変化し、混合を損ない、豊かな飲み物が傷んでしまう。2) だから、テリクレスやアンティゴノスの作とやらの杯、カップ、マグカップ、貝型カップ、その他無数にあるカップの類、ワインクーラー、加えて酒注ぎ器の類は打っちゃっておくがよい。2) 「なぜなら総じて、金や銀は、私的にも公的にも、妬みを招く代物であり」（プラトン『法律』12.955e8）、必要を超えて手に入れることは稀であり、保持しておくことは難しく、用いることは適切でない。3) 実際、浮き彫り細工師たちによる、ガラス上の微細を尽した戯巧は、技巧が加わっているだけに碎けやすく、慎重に扱いまた飲むことを教えるが、われわれの良俗によって限定されるべきであろう。また銀の寝台や鉢、受け皿、板皿、ボウル、これらに加えて銀や金の調度は、あるものは食料を入れる目的で、またあるものは、その名を語ることと憚られるような他の用途に用いられる。よく燃える香杉（ホロス『オゲュセア』5.60）、シトロネ、エボニー、象牙で設えられた三脚台、脚は銀で象牙細工の入った寝台、金の斑が入った亀壺、多彩な彫細工、紫貝をあしらった長椅子、他の入手困難な調度品などは、無趣味な虚栄の証左であり、妬みと愚かさの対象となる。これらはすべて売り飛ばすべきであり、そのために熱を上げるべきいかなる価値も持ち合わせていない。

4) 〈時は迫っている〉（1コリント7,29）と使徒も言っている。だから、ちょうど行列において、ある者たちが外肌に油を塗り、驚くべき姿で厳粛を装い、内側は憐れむべきあり様であるのと同じように、笑止千万な身づくろいをしていくべきときではない。36.1) 使徒はこのことを明らかにして、より正確に次のように付言する。〈これからは、妻を持つ人は持たない人のように、物を買う人は持たない人のようであるべきだ〉（1コリント7,29－30）。だが婚姻に関する提言に関しては、神は〈増えよ〉（創世1,28）と言っているわけで、先の傲岸は、主の力ある御言葉を通して規定されるべきだとは思われないだろうか。2) それゆえ主はこう言われる。〈あなたの財産を売って、貧しい人々に与えよ。そして、わたしの後に付いて来なさい〉（マタイ19,21）。傲岸を脱して神に従え。死すべき振る舞いを棄て、あなたのもの、奪い取られることのない善、つまり神への信、受難に遭われた方への同意、人への善行、最も掛け替えのない財産だけを携えて従え。3) わたしは、直截にこう法を定めているプラトンをも受け容れる。彼は言う、「金や銀の富を持つべきではない」（プラトン『法律』7.801b6）。そればかりでなく、必要な用途に用いられない無用の調度、あるいは同じものが多面の用途に供せられ得ないような貧弱な調度は持つべきでなく、多財産主

義とは決別すべきである、と（『法律』5,746e5）。4）神の言葉である聖書も、実に美しく、自愛主義で虚栄的な者に向けてこう語っている。〈どこにいるのか、諸国の民の指導者たち、地上の獣さえ治めた者たちは。また空の鳥と戯れ、人が頼みとする金と銀とを蓄え、どれほど手に入れても満足しなかった者たちは。心を碎いて銀や金に細工を施した者たちは。彼らの業は見出されず、彼らは消え去って冥府に降った〉（バルク3,16－19）。これこそ、傲岸の報いである。

37.1) というのも、われわれが耕すときに、もし鍬や鋤が必要であれば、銀の鍬や金のショベルを鑄る者はあるまい。むしろ仕事をしやすい質料で、高価でないものを農耕に用いることであろう。では家庭の調度に関するのと同じ考えを、似たような事柄を観想する者が抱くことを何が妨げるだろうか。その尺度は用途であって、豪華さであってはならない。2) 何故だろうか。語りたまえ。食卓用のナイフは、もしその取っ手が銀製あるいは象牙製のものでないとして、切れないだろうか。あるいは肉切れのために、いわば共闘者を招くように、インド製の鉄を鑄なければならないだろうか。では、手水器が陶器であったとして、手洗い用の水を汲んでおけないだろうか。足洗い器は、足に関する手水器ではないだろうか。3) 実に、象牙の脚を備えた食卓は、1オボロスのパンを載せるのに、不可欠であろうか。あるいはランプは、金製でなく陶器だからというので、光のために使えないだろうか。わたしは、わらの寝床は象牙のベッドに比して、寝心地は悪くなく、また山羊の覆いは、下に敷くにも十分すぎる程であり、紫や真紅の敷物などは必要がないと言いたい。おそらく節儉の意味は、諸悪の根源たる浪費の愚かしさを通じて認識されるだろう。

38.1) これほどまでに大きな迷妄がどういうものであるか、美の欺瞞がいかなるものかを知るがよい。主は質素な鉢に食物を取り、緑なす地面に弟子たちを座らせ（マタイ14,19）、手拭いを腰に巻いて弟子たちの足を洗った。謙遜な神にして万物の主である方は、天から銀の洗足器を持参したりしなかった。2) また主は、陶器の壺で井戸から水を汲み上げていたサマリアの婦人に、水を飲ませてくれるよう懇願したが、その際、王に相応しい黄金を要求したのではなく、渇きを簡単に癒すことを教えた。虚栄ではなく、用途を示されたのである。また主は、宴の場で食べかつ飲んだが、その際大地から金属を掘り出すのではなく、銀や金、すなわち鍮を含む鉱物の器具を用いることはなかった。鍮は、質料が虚しく膨張する際に噴出すものだからである。

3) 総じて、食物も衣類も調度も、その他すべて、家庭に関わるものは、端的に言えば、キリスト教徒の生活様式に適わしいものであらねばならない。顔、

年齢、目的、時宜にあわせて、適切に工夫すべきである。なぜならわれわれは、一なる神に仕えるものであらねばならないのだから、財産も、それに加えて道具類も、一なる善美なる生の象徴として示されるべきである。そして一人ひとりの人間が、分裂することのない信仰とともに、一貫した生き方をもって、この一なる姿勢に従い調和するものに映るように為さねばならないのである。4) われわれが難なく獲得し、ふつうに用いているものをわれわれは賞讃し、容易にそれを守り、気軽に分かち合う。簡素な使用は、贅沢なものに比べてより優れ、より勝る。5) 要するに、正しく統御されていない富は、悪の牙城であり、それを目ざす多くの者たちは、遂に天の王国に入ることはできまい。それはまず体面に病んでいるためであり、倨傲のために傲慢に生活しているためである。

39.1) さて救いのために尽力する者は、次のことをまず自覚しておかねばならない。それは、われわれの許にある所有物はすべて、使用されるためにあり、所有は自足のためにあり、その所有とは、ごくわずかなものから編み出したものであるということである。貪欲から宝物に喜びをなす者は虚しい。〈報酬を集める者は、穴の開いた袋に集める〉(ハガイ1,6)。それは、種を集め蓄えても不足する者であり、誰にも分かち与えない。2) 人々が、まるで自分の顧問を連れているかのように、銀の便器と水晶の尿瓶を携帯しているとすれば、大いに冷やかしと嘲笑の種となるだろう。また富裕な婦人が、富める女性には贅を極める以外には発散の方法がないと言わんばかりに、排泄物の容器を金で作らせているとすれば、同様にばかげたことであろう。彼らに対してわたしが祈ることには、一生の間、金など排泄物と同じ値打ちしかないと判断することである。3) さていまや、貪欲こそ悪の牙城であることが判ったが、この貪欲を、使徒はすべての悪の根源と呼んでこう述べている。〈金銭を追求するうちに信仰から迷い出て、幾多の苦しみに自らをさいなんだ者がある〉(1テチ6,10)。4) 然るに最善の富とは、欲情をめぐる貧困と真の寛厚である。これは、富に関して倨岸であるのではなく、富を軽蔑することである。しかるに調度のことを誇るの、実に恥ずかしいことである。というのも、調度に熱を挙げること自体がすでに正しくないからであり、調度は、望めば市場から買い求めてくることができるからである。しかるに知恵は、地上の通貨では、また市場では買うことができない。天において売られているものであり、義なる通貨、すなわち不減なる御言葉、王的黄金でもって売られているものなのである。

Ⅳ. 饗宴にはいかに与かるべきか。

40.1) さて、理性的宴からは酒宴 (kómos) は遠ざけねばならないが、そればかりではなく、酔っ払った状態で酒宴を張る虚しき徹夜祭も然りである。というのも酒宴とは酩酊における倦怠であり、エロスに満ちた乱痴気騒ぎだからである。エロスと酩酊とは、非理性的情動であり、本来の合唱隊とは遠く隔てておくべきである。また酒宴とは、言わば酔っ払った状態で酒とともに過ごす徹夜祭であり、刺激的酩酊また倒錯の交情、破廉恥な無礼講 (tolma) である。2) そこでは、笛や豎琴、合唱隊、舞踏隊、エジプト人の拍手隊、そのような乱舞による無秩序で不適切、無教養的な運動が、総じてシンバルや太鼓が響き怪奇の楽器がとどろく中で展開される。というのもわたしには、その種の饗宴は、まったくこのような酩酊の劇場と化すと思われるからである。3) 〈われわれは闇の行いを棄て、光の武具を身につけよう〉と使徒は勧告している。〈昼のうちに品位をもって歩み、酒宴や酩酊、淫乱と好色〉(ローマ 13,12 - 13) にうつつを抜かすのをやめよう、と使徒は語る。

41.1) さて、シュリンクス〔パンの笛〕は牧夫に与えられるべきものであり、笛〔アウロス〕は霊に恐れ、偶像礼拝に励む人間にわかれたる。というのも、そのような楽器はしらふの饗宴からは本当に追放されるべきであり、人間よりも獣にむしろ相応しいもので、人間ならより非理性的な者に似つかわしいからである。2) われわれは、鹿はシュリンクスによって操られると聞いているし、狩人たちにより、調べとともに罠に向けて駆られ追いやられると言われる。一方交合する馬には、たとえば笛による祝婚の調べが奏でられる。音楽家たちは、そのような調べを「馬合わせ」と呼んでいる。3) およそありとあらゆる卑劣な光景、音、かいつまんで言えば恥ずべき無節度な感覚、真の非感覚は、徹頭徹尾排斥すべきである。眼と耳のなかで暴れまわる女々しい快楽には警戒せねばならない。というのも、カリアの音楽の調べと悲しげなリズムが炸裂すれば、さまざまな薬物が品位を破滅させ、放埒で卑劣な音楽が情動にまで忍び込んでくるのである。

4) このような酒宴から、神的なリトゥルギアを分かち霊は、次のように奏でている(詩篇 150,3 - 4)。〈ラッパの響きで主を讃えよ〉。なぜならラッパの響きは、死者を蘇らせるからである。〈豎琴を奏でて主を讃えよ〉。なぜなら舌とは主の豎琴だからである。〈そしてキタラの調べで主を讃えよ〉。口はキトラであると考えよ。なぜなら撥で叩くことは、聖霊で奏でることだからである。

〈太鼓と合唱隊で主を讃えよ〉。詩篇作者は、教会とは、皮膚が響かせるままに肉の復活を実践する存在だと語る。5) 〈弦と楽器で主を讃えよ〉。作者は、楽器とはわれわれの肉体であり、弦とはわれわれの神経であって、その弦によって緊張をほどよく司り、霊によって人間の声を叩き、発させるのだと言う。〈轟く響きのシンバルで主を讃えよ〉。ここでシンバルと言われているのは口の中の舌であり、その舌は、唇を打つことで響きを発するという。42.1) それゆえ、詩人は人類そして人間性に向かって呼びかけ、〈すべての者・息吹は、主を讃えよ〉と語る。すなわち主が創造されたすべての息吹は、主がこれを見そなわす、の意である。まことに、人間とは平和的な楽器である。もし他に探索の眼を向けてみるならば、戦闘的な楽器は見つかるであろう。それは、あるいは欲情を焚きつけたり、エロスを燃やしつけたり、気概を発散させたりするものである。2) 実に、それらの楽器は戦争に際して用いられる。テュレニア人はラッパを、アルカディア人はシュリンクスを、シケリア人はティンバロンを、クレタ人はリュラを、スパルタ人は笛を、トラキア人は角笛を、エジプト人は太鼓を、そしてアラビア人はシンバルを用いる。3) しかるにわれわれは、一つの楽器、すなわち唯一平和的な楽器である御言葉を用いる。われわれはこの御言葉でもって神を讃美し、もはやいにしえの豎琴やラッパや太鼓や笛や弦楽器を用いることはしない。これらはかつて、戦いに際して競技者が、また祝祭の際に神的な恐れを軽んじる者が用いることを常とした楽器である。それは、彼らの放埒な思いをそのようなリズムで惹起するためのものであった。

43.1) ところで、宴会に際してのわれわれの配慮は、律法にしたがって二重であるべきである。というのも、〈あなたの神である主を愛せよ〉、しかる後〈あなたの隣人を愛せよ〉ということであるから、まず第一に感謝の祭義と詩篇唱和による神への配慮があるべきであり、第二に厳粛な話し方による隣人への配慮が来るべきである。なぜなら使徒は〈主の御言葉が、あなた方のうちに豊かに住まうように〉(コリ1 3,16) と述べているからである。2) しかるにこの御言葉は、時機、メンバー、場所に調和し、それらに適うものであるが、いまや神的宴に適合したものでもある。使徒は、さらにこう付け加えている。〈すべての知恵を尽して教え、自らを律しなさい。詩篇、讃歌、霊的歌を感謝のうちに捧げ、あなた方の心のうちに、神に向かって歌いなさい。言葉によるにせよ、行いによるにせよ、何であれあなた方が為すことすべて、そのすべてが主なるイエスの名におけるものとなるよう、神であり主の父である方に感謝を捧げなさい〉(コリ1 3,16 - 17)。3) これこそわれらにとっての感謝の酒宴であ

る。たとえキタラやリュラにあわせて、歌ったり奏でたりすることを望む際にも、非難は当たらない。神に感謝を捧げるヘブライ人の王を模倣するがよい。〈義しき者らよ、主において喜べ。讃美は直き者らに似つかわしい〉と預言は語っている（詩篇 32,1－3）。〈キタラをもって主に感謝を捧げよ。十弦の豎琴をもって主に奏でよ。新しき歌を主に歌え〉。ここで「十弦の豎琴」とは、十個の要素のうちに明らかにされる、御言葉イエスを示しているものではないだろうか。

44.1) われわれが食事に与かる前には、万物の創造者を讃美するのが適しい。ちょうどそれと同じように、宴会に際して創造主の被造物に与かる者は、主に詩篇を奏でるのが相応しい。というのも詩篇は、調べを伴った思慮深い讃美だからである。使徒は詩篇を〈霊的な歌〉と呼んでいる（エフ5,19；コロイ3,16）。2) また総じて、眠りに就く前に、神の恵みと人間愛に与かる者は、神に感謝を捧げることが敬虔な業である。それはわれわれが、神のうちに眠りに赴くことができるためでもある。知恵は語る。〈歌を唇にのぼせて主に感謝を捧げよ。主の命のうちにすべてのことが適わしく実現し、その救いの業において欠けた点がないように〉（シラ 39,15；18）。3) だがそればかりでなく、いにしえのギリシア人の間でも、饗宴の祭りの場で杯を滴らせながら、ヘブライの詩篇に倣ってスコリオンという猥雑な歌が歌われた。それは全員で一斉に声を合わせて「いよっ、パイアーン！」と叫ぶもので、時には、歌にあわせて手に飲み物を携え、互いに掛け合うこともあった。だが彼らの方がより音楽的で、リュラにあわせて歌う習慣があった。4) しかし、性愛に関わるこちらの歌のほうかはるかに熱狂的であり、それに対して讃歌は、神に献げる歌であるべきである。詩篇作家は語る（詩篇 149,1－4）。〈合唱隊のなかで主の名を褒め讃えよ。太鼓を打ち豎琴を奏でて主への讃美を奏でよ〉。では奏でる合唱隊とは誰であろうか。聖霊はそれをあなたに告げるであろう。〈主への讃美は、敬虔なる者の集いのうちにあり、彼らの王に喜びの歌が捧げられる〉。さらに詩人は加えて言う。〈主がその民のうちに祝福を垂れるように〉。5) というのも思慮に満ちた調和こそ受け取られるべきであり、われわれの熱狂的な思いを駆り立てるような、非常に湿潤な調和はできる限り排斥すべきである。その種の調和は、節回しに関してまずきに満ち、柔弱と饒舌に向けて逸れる。しかるに厳粛で思慮に満ちた調べは酩酊の歓楽からは決別する。したがって色彩豊かな調和は、破廉恥な泥酔と、花を愛でる遊女的な音楽に任せておくべきである。

V. 笑いについて。

45.1) 笑うべき、あるいはむしろ嘲笑されるべき情動を模倣する人間は、われわれの共同体 (politeia) からは追放されるべきである。というのも、思惟と習性から流れ出るすべてのロゴスに対しては、笑うべき習性から繰り出される言辞でない限り、何ら笑いの言辞を発することは不可能だからである。〈悪しき実を結ぶ良い木はなく、良い木を結ぶ悪しき木もない〉(ルカ6,43) という言葉は、この場合にも当てはまるであろう。というのも言葉とは、思惟の実りなのであるから。2) したがって、笑いを醸す者どもをわれわれの共同体から追放すべきだとすれば、われわれ自身が笑いを醸すのは、大いに不適切だと言わねばならない。というのも、その聴衆になることさえ禁じられているのに、その模倣者となってしまうとすれば、本末転倒だからである。自分自身が笑いの的になることを目指すというのは、一層本末転倒なこと、すなわち傲慢で笑止千万なことであろう。3) なぜなら、ちょうど行列の中のある者のようにおかしな仕草をすることを、われわれが敢えてやらないとすれば、内面性に関して一層笑止千万なあり方に形成された者を、われわれはどうして相応しく堪え得ようか。4) またもし、顔面を笑止千万なあり方に作り変えることを、われわれが決して進んではやらないとすれば、人間に関わるすべての被造物よりも高貴なもの、すなわち御言葉を愚弄しつつ、笑うべき姿になったり、あるいはそう見えるようにしたり努めようとすることが、どうしてロゴスに従っての行為だと言えるだろうか。そう努めようとすること自体、冗談である。なぜなら、笑いに関する言葉自体、聴くに値しないものであり、名を挙げることで、人間は恥ずべき行為へと習慣づけられるものだからである。ウィットは確かに必要だが、笑いを醸す必要はない。

46.1) だがそれに留まらず、笑いそのものを抑制すべきである。もしいかなる仕方であれ、笑いを禁じえないというのであれば、品位を表すようにし、決して、笑いに流され自制心のなさを露呈するようであってはならない。というのも、人間にとって純粹に本性的なものである限り、人間から取り除くことは不可能であり、むしろそれに節度と適わしい時機とを設定すべきである。2) 人間が笑う動物だからといって、すべてに関して笑うべきではない。それはちょうど、馬がいなく動物だからといって、絶えずいないといけないのと同様である。理性的動物として、自制心をもって自らを調べ、われわれの熱意の厳肅な面と、それを上回る面とを、適度に緩めつつ、決して度を越

して解放してしまうことのないようにすべきである。3) というのも、楽器と同様に、顔面を調和よく上品に緩めることは、「微笑」と呼ばれる（こうして、顔面にリラックスが広がるわけである）。この種の笑いは、賢慮を備えた人の仕草である。ところが調和を乱しつつ顔面を解放することは、もし女性に生じるならば「くすくす笑い」と呼ばれ、この笑いはみだらなものである。一方男性に生じるならば「爆笑」と呼ばれ、この笑いは求婚者に相応しく（ホロス『オデュッセイア』18.100）、また倨傲に満ちたものである。聖書はこう記している。〈愚か者は笑う際に自らの声を高める〉（シラ21,20）。4) 一方〈賢者は、にこやかに、静かに微笑む〉。ここでは賢者が思慮ある者とされ、愚かさに身を置く者は逆だとされている。

47.1) だが逆に、悲痛な顔をすべきではなく、重々しくあるべきである。わたしには、

「恐ろしい容貌に微笑を浮かべ」（ホロス『イリアス』7.212）

るように見える者〔アイアス〕は好ましく思える。というのも「彼の笑いには笑止な点が少ない」（プラトン『国家』7.518b3）からである。2) だがこの「微笑」も、よく馴けて訓導せねばならない。そしてもし恥じている人に遭遇したなら、微笑んでいるというよりも赤面しているように見えるようにし、共感から一緒に笑っているようには見えないようにすべきである。一方悲しんでいる人に遭遇したなら、それを喜んでいるように思われるのではなく、伏し目がちであるように見えるのが適当である。後者は人間的な理性の徴であるが、前者は残忍な判断を秘めていることを示すからである。3) つまり、常に笑うべきなのではないし（それは無節度である）、年長者や、聴き従うに値する他者が誰か臨席している場合には、われわれの心を和ませてくれる人がいる場合を除き、笑うべきではない。誰がその場にいるかに構わず笑うべきではないし、どんな場所であれ、誰に対してであれ、あるいは何に関してであれ、笑うべきではない。とりわけ若者や女性にとって、笑いとは中傷される原因となる罠なのである。

48.1) しかるに、遠くからでも恐ろしい顔つきをしているように見えるのは、試みようとする者を追い払う力を持つ。放蕩の攻撃に対しては、厳粛さはその姿を見せるだけでこれを打倒することができる。いわば酒が、無思慮な男どもに対して、例外なく

「にこやかに笑ったり、踊ったりさせ始める」

（ホロス『オデュッセイア』14.465－466）

もので、女々しい性格をも陽気さへと転じる。2) だが逆に、何でも言えると

いう自由さが、無節度をどのように卑猥な言辞へと増大せしめるかということも確認しておかねばならない。

「語らずにおいた方が良かった言葉まで、発してしまった」

(ホロス『オデュッセイア』14.463)。

3) つまり、下心ある人間の品性は、とりわけ酒の場で露わになるということである。酒宴では、卑しくも言いたい放題となり、欺瞞が露わとなり、ロゴスが酩酊のために頭重となって靈魂のうちに眠りこける一方、不気味な情動が目を覚まし、理性の弱さを従えてしまうためである。

VI. 猥雑な言説について。

49.1) 猥雑な言葉遣いは、われわれは徹頭徹尾これを避けるべきである。猥雑な言辞を弄する者に対しては、にらみつけるような目つきと、顔を背けること、それにいわゆる「鼻であしらう」態度でもって、さらにはしばしば厳しい言葉でもって制すべきである。主はこう言われる。〈口から出る言葉が、人を汚すのである〉(マタイ15,18)。そしてそういう言葉遣いをする者を、優れた資質の、品位ある、賢慮を備えた人物ではなく、貧相で、野卑で、教養がなく、放埒な人間だということを明らかにする。2) 神的な訓導者は、恥ずべき言葉を耳にしたり、同様の事柄が目に入ったりすることに対しても同様の扱いをする。その様はちょうど、ボクシングの練習をする子供に対してと同様である。猥雑な言葉が彼らの耳を悩まさないよう、いわば競技者の耳当てのように節度ある言葉を当てがう。それは、淫乱の打撃が靈魂を殺害すべく忍び込んで来得ないようにするためである。また両眼については、美しきものを目にするように正す。目を駄目にするよりも足を駄目にするほうがましだと言われているゆえんである。

50.1) そのような猥雑な言説について、使徒はこれを排撃し、こう述べている。〈腐敗した言葉は、いっさいあなた方の口から発せられてはならず、ただ善き言葉のみ語れ〉(エフェソ4,29)。さらにこう続ける。〈聖なる者に相応しく、あなた方の間では、猥雑な言葉や愚かしい言葉、相応しくない下品な冗談はいっさい口にしてはならない。むしろ、感謝の言葉を口にせよ〉(エフェソ5,3-4)。2) もし兄弟を「愚か者」と言う者が裁きに遭うとすれば(マタイ5,22)、愚かしい言葉を吐く者について、われわれは何と表現すればよいのだろうか。それに関しては次のように記されている(マタイ12,36-37)。〈人はみな、話した

つまらない言葉についても、裁きの日に主に向かって申し開きをせねばならない。あるいはまたこうも語られる。〈あなたは、自分の言葉によって義とされ、また自分の言葉によって罪ある者とされる〉。3) では、救いのための耳当て、もしくは滑りやすい目の訓導とは、一体どのようなものだろうか。義なる人々との語らい合いは装備を固め、真理から逸脱させようと欲する者どもから耳を防御してくれるという。

4) 「悪しき語らいは、善き品性を台無しにする」

(マトル断片 187 ケテ)

と喜劇詩は述べる。使徒はさらに明確にこう語る。〈あなた方は、悪から遠ざかり、善から離れぬ者となりなさい〉(ローマ 12,9)。なぜなら、聖なる人々と交わる者は聖化されるからである。

51.1) 猥雑な噂話、言葉、光景は、徹底して遠ざけねばならない。だが猥雑な行為からは、より一層無縁であらねばならない。それはまず、身体のうち相応しくない部分を見せたり、裸にしたりすることによる、あるいは恥部を見ることによる行為である。節度ある子供は、義しき人〔ノア〕の恥ずかしき裸体を見ることに耐え得なかった(創世 9,23)。だが酩酊が裸にしたものに、賢慮は覆いを掛けた。それは無知ゆえの過ちが、目に見えた場合であった(創世 9,21)。2) だがそれに劣らず、キリストに信を置く者たちの耳が無知であらねばならないような事柄の発語すら、それとは無縁でなければならない。それゆえわたしには、訓導者はわれわれに、不品行な事柄については何一つ語ることを認めていないように思われる。これは放蕩に対して、そのはるか手前で駆逐するやり方であろう。というのも過ちの根を切断するためには、常に卓抜な技量を必要とするからである。ちょうど〈姦淫するな〉と言うために、〈欲してはならない〉と言うように(マタイ 5,28)。姦淫とは欲情、すなわち悪しき根の実りだからである。

52.1) 続いて同様に、訓導者は、名前の濫用を攻撃する。これは、無自制による不適切な混用を打ち砕く意味がある。というのも名前における無規律は、行動に向けての無秩序であろうとする習慣を生み出すからである。これに対し、名に関して節度を保とうと努めることは、好色を制御することだからである。2) だがわれわれは、すでにより深く、真に猥雑な呼び名が置かれているのが、名前のうちにでも、生殖器部位にでも、あるいは婚姻に伴う交わりのうちにでもないということを説明し終えた。名詞類は、慣例上それらをめぐって分かれたれ設定されているに過ぎない。というのも、「膝」とか「脚」とかと、その四

肢の部位とはイコールではないし、それらに関して置かれている名前や、それらの部位の働きが猥雑なわけではない（というのも、人間の四肢あるいは恥部は、羞恥に値するものであって、恥に当たるものではないのだから）。猥雑なのは、掟に反したそれらの活動であり、これが理由となって、不名誉と非難、そして懲罰に相当する。ただ悪と、悪にもとづく活動のみが真に恥すべきものなのである。3) これらとの類比関係において、悪の仕業をめぐる言説は当然、恥に当たる猥雑な言説だと呼ばれて当然である。たとえば姦通、少年愛、その他同種の事柄に関して語り合うことがそれに当たる。およそ愚かしい会話もまた、沈黙すべきである。4) 聖書にはこう語られている。〈饒舌からは、罪は避け得ない〉（箴言 10,19）。こうして、長話は裁きを受ける。〈賢者は沈黙の姿で見出される。多弁には憎悪が向けられる〉（シラ 20,5）。実に、饒舌家は自ら自身にとってうんざりするものなのである。〈言葉を長引かせる者は、自らの靈魂を害う〉（シラ 20,8）。

Ⅶ. ともにつつましく生きようとする人が守るべきことどもについて。

53.1) さてわれわれとしては、倨傲 (hybris) に走った人をあざけることは、徹底して避けなければならない。そこから争いや戦争、敵意が勃発するからである。倨傲とは、酩酊の僕であると考ええる。行ないによってのみならず、言葉によっても人間は裁かれる。知恵は語る。〈饗宴の席では、隣人を難詰してはならない。彼に非難の言葉を掛けてはならない〉（シラ 31,31）。2) というのも、とりわけ聖なる人々と共にあることが勧められるのであれば、聖者をあざけることは罪である。聖書にはこう言われている。〈愚か者の口からは倨傲の杖〉（箴言 14,3）。ここでは、倨傲の踏み石のことが「杖」と呼ばれている。その杖に頼り、その上に休らうのが倨傲である。3) それゆえ、次のように勧告する使徒にわたしは讃嘆を禁じえない。使徒はわれわれに対して、冗談 (eutrapela) も、不適切な言葉も発するべきではないと戒める（エフェソ 5,4）。なぜなら、宴に及ぶ会合は、愛を通して行われ、饗宴の目的とは、共にある人々への思いやり (philophrosyné) であり、食べ物や飲み物は愛に随伴する。したがってどうして、ロゴスにしたがって振舞うべきでないことがあろうか。愛のゆえに、これは疑い得ないことである。4) というのももし、互いに対する好意を増し高めるために集うのだとすれば、なぜあざけりを通じて敵意をあおったりするだろうか。反論するよりも沈黙する方がまさっている。その際、罪は無学に帰

すようにするのである。真に〈口において舌禍を招かない人は幸いである。罪を悔やむ思いに悩まされることがない〉(シラ14,1)。すなわち、喋って罪を犯した事柄を悔いることも、誰かを傷つけることを喋ったと悔いることもないのである。

5) 総じて若者や娘たちは、相応しくない事柄をめぐって躓くことがないように、上述のような類の酒宴は極力控えるべきである。というのも馴染みのない噂話や、不適切な光景は、彼らの中でまだ波打っている信仰から思考を遠ざけるからである。年齢の不安定さが、欲情の傾きやすさに力を貸しもする。時には、他の人々の躓きの原因となる場合すらある。彼ら若者は、非常に危険な年齢にあるからである。

54.1) 知恵が巧みに訓戒してくれているように思われる(シラ9,9)。〈既婚女性とは決して同席するな。また、肘をついて彼女と横になるな〉。すなわち、彼女と親密に宴に与かるな、共に食事をするな、ということである。それゆえこう付言される。〈彼女とともに酒の席に与かるな、あなたの心が彼女に移り、あなたの血が騒いで滅びに至らしめないように〉。酒宴の場での自由気ままは躓きのもとであり、心を乱させかねない。「既婚女性」と呼ばれているのは、共棲のきずなを解こうという試みにおいて、危険がより大きいからである。2) だがもし彼女たちと近づく必要性に迫られたなら、婦人たちにはショールですっぱりと外見を隠させ、内面は恥じらいで包ませるがよい。未婚女性の場合には、男たちの、しかも酔っ払った者たちの饗宴に立ち交じろうという悪魔とは縁遠いであろう。

3) しかるに少年たちの場合は、寝台に視線を留めたまま、動かずに肘にもたれて、ただ耳だけで宴に与かれればよい。だがもし座るのであれば、足を交差させず、また一方の腿を他方の腿の上に乗せたり、頬杖をついたりしないようにすべきである。自分をもてあますというのは卑しいことであるが、それは若者にとって非難的となる。55.1) 絶えず、姿勢を動かして変化させるのは、軽々しさの証しだからである。

真に賢慮ある者は、飲む場合でも食べる場合でも、少しだけ、しかもゆっくりと、つまり性急にではなく、食事の初めでも合い間でも心がけて口にすべきであり、また早めにかつそっと終わるべきである。2) 知恵はこう語る。〈出されたものは人間らしく食べよ。品位よく、最初に食べ終えよ。そして大勢の者と同席する場合は、彼らよりも先に手を伸ばすな〉(シラ31,16－18)。3) 食い意地にあおられて飛び入るようなことは、決してあってはならないし、もっ

と食べようとしてがつがつと手を伸ばすようなことはご法度である。それは食べる時間を引き延ばし、自制心のなさを露呈するだけである。ちょうど獣が食物をそうするように、食べかけのようなあり様を見せるべきではないし、食べきれないような量を運ばせるべきでもない。人間は本性的に肉食ではなく、穀食であるのだから。

56.1) また、多くの人に先んじて立ち上がり、饗宴の場から品位をもって立ち去るというのも、賢慮ある人間のなせる業である。知恵は語る。〈時間になったら、グズグズせずに立ち上がり、自分の家に早足で帰れ〉（シ 32,11）。〈十二人は弟子たちの群れを呼び集めて言った。「わたしたちが食卓のために仕えて、神の御言葉をなおざりにするのはよくない」〉（使徒 6,2）。この言葉を守っていたならば、飽食はずっとうまく防ぎ得たはずである。2) しかしながら、その同じ使徒たちが〈アンティオキア、シリア、キリキアにいる兄弟たち〉に書き送って言うには、〈聖霊とわれわれは、次の必要な事柄以外、一切あなた方に重荷を負わせないことに決定した。すなわち、偶像に献げられたものと、血と、絞め殺した動物の肉と、好色とを避けることである。以上を慎み、健康であれ〉（使徒 15,23；28－29）。3) しかるに酒宴は、ドクニンジンのように避けなければならない。なぜなら両者とも、死に向けて引き摺り下ろすからである。「度を越した笑い」や、過度の「涙は抑制せねばならない」（プラトン『法律』5.732e1）。なぜならしばしば、酒に酔った者が大いに呵呵大笑し、その後われ知らず酒宴に飲まれるように涙に暮れるからである。女々しくなったり倨傲に陥ったりするのは、御言葉の調べからは遠い。

57.1) 年長者たちは、若者を子供のように見なして、稀にはあるが、それでも時には、彼らをからかうのも良からう。それは、若者たちの品性を養おうとの目的からである。すなわちたとえば、恥ずかしがり屋で黙っている者に対しては、このようにかからってみるのはどうだろうか。「この息子は」（もちろんその黙っている子を指して）、「喋るのを止めない」と。2) そのようなからかいには、若者の慎みを高め、彼に備わっていない欠点を詰ることによって、彼のうちに備わっている良い面を冗談風に引き立てる効果がある。この思いつきが教育的なのは、備わっていないものを通して備わっている面を確かなものにするためである。あるいはたとえば、水しか飲まない思慮深い者に対して、酒宴に与かり酩酊に身を委ねるように言ったとしても、それはこのような目的を持つてのことである。3) だがもし誰か冗談好きの人がいるとすれば、われわれは、ちょっと変わった言葉は、あたかも一杯になった杯のように、黙ってい

るべきであるし、無視すべきである。というのもそのような場面での冗談は躓きのもとだからである。〈無知な者の口は破滅に近い〉(箴言 10,14)。〈虚しい話を受け入れるな。不正な者に加担して、不正な証人となることに同意するな〉(出エジプト 23,1)。これは非難や誹謗ばかりでなく、悪意に関しても、それに加担してはならない、の意である。

58.1) わたしとしては、賢慮ある者はその声にも節度を設け、誰に語りかけてよいかを、あるいはそれが返答の場面であっても、考慮すべきだと考える。沈黙は女性の徳であり、若者にとっての危険を逃れる賜物であるが、ロゴス・理性は、成人の年齢に達した者の善である。〈年長者よ、宴会の場で語れ。それはあなたに適わしい。だが要点を外さずに語り、知識の正確さを示せ。若者よ〉と知恵はあなたに語りかける(シラ 32,3; 5; 7-8)。〈もしあなたに必要が生じたなら、語れ。もしも二度まで、尋ねられたならば。話をよく要約し、わずかな言葉で語れ〉。3) 対話者は双方とも、自らの声を均整のうちに計り取るべきである。発語の際に絶叫するようなのは、非常に気違いじみているし、最後まで聞こえ切らないような発声は悪印象である。よく聞こえないからである。後者は卑しさ、前者は頑固さの徴である。弁説には、虚しい勝利のための負けん気も避けるべきである。というのもわれわれの目的は平静(ataraxia)だからである。そして〈あなたに平和あれ〉(ルカ 24,36; ヨハネ 20,19; 26)の意味するところは、まさしくこの平静であり、〈あなたが聴く前に、言葉を発してはならない〉(シラ 11,8)のである。

59.1) だがそればかりでなく、女々しい声は女じみた者のもので、賢慮ある者は声に関してもよく計り取られている。大きさ・長さ・速さ・量に関して、それらが自らの声をよく制御しているのである。駄弁・多弁・饒舌であってはならず、速過ぎたり激しすぎたりする話し方も避けるべきである。2) というのも声とはそれ自身が、言わば、正義に与かるべきものであり、叫んだり吼えたりする者は制御せねばならない。そういうわけで、知将オデュッセウスもテルシテスを打って戒めたのであろう。すなわち彼一人

「口汚く罵り続けて止まなかった。

この男、頭の中はけしからぬ悪口雑言がぎっしりと

詰まっていた」(ホメロス『イリアス』2.212-214)。

〈口数の多い者は、自分の町で忌み嫌われる〉(シラ 9,18)。3) 実に、愚かしき言動は古びた履物のごとく、ある場合は悪事によってすり減らされるが、唯一舌だけは災いにつながる。4) かくして知恵は、人生に有益なかたちでこう勸

告する。〈長老たちの集いの場では、無駄口をたたくな〉(シラ7,14)。彼はこのように、上からはわれわれの愚かしき行為を撃退し、神の視点に立ち、言葉を節するよう、次のように掟を定める。〈祈りにおいては、くどくどと言言葉を繰り返すな〉(シラ7,14)。60.1) 舌打ち、歯軋り、召使を呼ぶための指鳴らしなどは、愚かしい合図であり、理性的人間はこれを避けるべきである。また、絶えず唾を吐いたり、無理に咳払いをしたりするのも避けるべきである。飲んでいる際に鼻をかむのも良くない。ともに酒宴に与かっている人々のことを気遣うべきであり、彼らが嫌悪から、無節度を暴露するような無作法を忌み嫌う様なことがないようにすべきだからである。うまやと糞は、牛やロバと同じように同場所にあるべきではない。だが多くの人々は、同時に鼻をかみ、唾を吐き、そして晚餐に与かる。2) もし、くしゃみが出るようなら、げっぶと同様、響かせるのはご法度で、騒音のために隣人が彼の無教養に目をひそめてしまう。むしろ、げっぶは飲み込むべきなのに対して、静かに吐き出す息とともに、口の形を上品に整えるのがよい。決して悲劇の役者がやるように、息を吸ってから大口を開けてしてはならない。3) だがくしゃみが呼吸を混乱させることは、ゆっくりと呼吸を整えて避けなければならない。こうして、落ち着いたかたちで、呼吸の急激な威嚇を抑え、気道を癒す。そして残りの分をも、知らぬ間に空気が無理やり追い出してくれないか、試みるべきである。響きにあわせて、さらに何か付加しようと望むのは、横柄さと無節度の徴であり、決して付加すべきでない。4) 一方、歯を掘り抜いて歯茎が血に染まっているのは、自分自身にとって不快であるし、隣人に丸見えになる。また耳の痒みや、くしゃみをしたくてムズムズする感じなどは不快な感覚であり、抑え難い好色を誘引する。視覚上淫らな光景は避けるべきであり、それに関わる猥雑な言説もご法度である。視線を真っ直ぐにして、首を巡らせ、動きは静かにし、発言の際には手振りを交える。総じて、キリスト教徒は静けさ、安寧、風、平和の家族だからである。

VIII. 香油や花冠を用いるべきかどうか。

61.1) さて、われわれにとって王冠や香油を用いることは必要ではない。というのもこれらは快楽や放縦へと駆り立てるものであり、とりわけ夜が近づくとそれが甚だしいからである。ある婦人が「香油の壺」を聖なる晚餐の場に携えて来て、主の御足をぬぐい、主に喜ばれたことが伝えられている(ルカ7,37)。2)

またいにしえのユダヤ人の王たちが、金や高価な宝玉で身を飾ったことも知られている（サムエル下 12.30；歴代上 20.2）。

だがかの婦人は、まだロゴスに与っていなかった（というのも罪人であったから）、自分の許にあるもので最も素晴らしいと考えたもの、すなわち香油をもって、主に崇敬を表したのである。さらに彼女は、体の飾りである自らの髪でもって香油の滴りをぬぐい、痛悔の涙を主に注ぎかけたのだ。3) それゆえ〈彼女の罪は許された〉（ルカ 7.47）。これはまた主の教えと受難の象徴ともなりうる。というのも芳しき香油でぬぐわれた御足は、神の教えが、地の果てまで栄光とともに及ぶということを比喩的に語っているからである。〈なぜならその響きは地の果てにまで轟く〉（詩篇 18.5）。この解釈があまり一般的でないと思われるなら、主の御足とは、芳香の預言という香油を受け、聖霊の塗布に与った使徒たちである。62.1) いかにも、全世界を巡り福音を告げ知らせる使徒たちは「主の御足」という比喩的表現に相応しく、彼らについては『詩篇』を通して聖霊がこう預言している。〈そこへ赴き跪こう、主の御足が立つところへ〉（詩篇 131.7）、すなわちこれは「主の御足」である使徒たちが赴いたところ、との意であり、彼らを通じて地の果てにまで教えが告げ知らされるのである。2) 一方涙とは痛悔の意味であり、ほどかれた髪とは、装飾趣味からの解放、主による福音告知に伴う艱難を忍耐のうちに耐えるべきこと、旧約の虚栄が新約の信仰によって刷新されることを伝えている。

3) だがそればかりでなく、この場面に思いを致す者には、神秘的なかたちで主の受難をも表している。すなわち主ご自身はブドウ酒であり、そこからわれわれの上に憐れみが注がれる。一方香油とは偽りのブドウ酒であり、これは裏切り者のユダであって、香油でもって御足をぬぐわれた主はこの世での生から解放された。というのも死者たちは香油漬けにされるからである。しかるに悔い改めを果たしたわれわれ罪人たちは涙であり、われわれの過ちを赦して下さった主ご自身に信を置く者である。またほどかれた髪とは、見捨て置かれ悔いるイェルサレムであり、彼女を通して預言の哀歌が歌われる。4) しかるに主ご自身が、かのユダこそ欺かれた者であることを、われわれにこう述べて教えている。〈わたしとともに鉢に食べ物を浸している者、彼がわたしを裏切るだろう〉（マルコ 14.20；マタイ 26.23）。ともに飲む者が裏切り者であることがわかるだろうか。そしてこのユダその人が、接吻をもって主を裏切ったのだ。彼は欺瞞者と化し、別の古の欺瞞者を模倣して偽りの接吻をなし、民を次のように叱責する。〈この民は唇ではわたしを尊敬するが、その心はわたしから遠く離

れている〉（イザヤ29,13）。

63.1) 主が、憐れみ深い弟子は（浄らかな）油であるが、狡猾な裏切り者は毒入りの油であると告げているのも故なきことではない。それは油注がれた足が預言した事柄であり、主がユダの裏切りを受難へと先導したのである。2) また救い主が自ら弟子たちの足を洗い（ヨハネ13.5）、彼らを麗しき業へと遣わした。これは、彼らが諸国民に対してなす福音の旅を比喩的に表すもので、自らの権能によってそれを相応しく浄らかなものへと備えたのである。これらにあって香油が芳しき香りを放ち、芳香のすべての者に及び、語られたのである。というのも、主の受難がわれわれを芳香で満たし、ヘブライ人を罪で満たしたからである。3) 使徒はこのことをいとも明白に、次のように述べて示している。〈われわれを常にキリストのうちに凱旋させる神に感謝を捧げよう。神はご自身に関する覚智の香りを、あらゆる場において、われわれのために明らかになさる。われわれは神に捧げられる主の芳香であり、それは救われる者にあっても、滅び行く者にあっても変わらない。後者にとっては死から死へと至らせる香りであり、前者にとっては生命から生命へと至らせる香りなのだ〉（2コリント2,14－16）。

4) ユダヤ人の王たちが、黄金や、高価な石を散りばめた多彩な王冠を被るのに対して、キリスト者たちは、頭の上にキリストを象徴的に戴き、人知れず頭を主で飾っている。5) 実に、真珠あるいはエメラルドといった高価な石は、御言葉そのものを象徴している。黄金そのものもまた、腐敗を知らぬ御言葉・ロゴスであり、これは腐敗の毒を受け容れぬものである。東方の博士たちは、生まれたばかりのキリストに対して、王権の象徴として黄金を進呈したのである（マタイ2,11）。この冠は主の似像として不死のまま留まる。花のように枯れ萎んだりしないのである。

64.1) キュレネの人アリストIPPOSによる次のような言葉もわたしは知っている。アリストIPPOSは豪勢な生活をしていた。彼は次のような洒落た弁辞を語ったのである。香油を塗られた馬は、馬の徳に害を与えないし、油を塗った犬も、犬の徳に損害をもたさない。したがって人間もそうだと彼は結論づけ、論を終えた。2) しかしながら、馬や犬にとって香油が唯一のロゴスではない。これらの動物には、よりロゴスに基づく感覚が備わっているのだから、それらに少女のような香りを加えるための使用は非難されてしかるべきであろう。しかるに、このような香油には無限の差異があり、水鳥風、メタリック、王宮風、鷹の香風、エジプト風などがある。シモニデスはイアンボス詩におい

て、恥ずかしげもなく次のように語っている。

「わたしは香油、香水、トニックをつけてみた。

商人が売りつけに来たから」(セネカ断片 16 ウェスト)。

4) このほか、白百合の香油や糸杉の香油も用いられている。人々の間ではナルドの香油も評判がよい。またバラのオイルもあり、その他今でも婦人たちが用いているもの、湿潤系、乾燥系、ふきつけタイプ、いぶしタイプなどの香油がある。5) つまり人々によって、ほとんど毎日のように、限りない欲求を満たさせるべく、無尽蔵に香料が考案されているからである。こうして女性たちは、限りない美を追求し、多彩な香りをくゆらせる。彼女たちはさらに、衣服やベッド、家屋にも香を焚き、香を振りまく。そればかりでなく、ビデまでもが香油の香りを放つように強いるのである。

65.1) これほどまでに香油に熱を上げることに対して、ある人々が憤慨し、男の部屋まで女臭になるといって嫌悪するのは、わたしには正当なことと思われる。彼らは香油製造業者、香水屋たちを、秩序正しく治められた町から追放しようとし、さらには羊毛を花柄に染める染め屋職人たちまでも追放したいとしている。というのも、偽りの外套や塗油などは、真理の支配する都市に入ってくることは許されないからである。2) 実に、われわれの仲間たる男性たちは、香油ではなく善美の香りを漂わせ、一方女性には、パウダーやオイルではなく、王的な油であるキリストの香りをくゆらせるべきである。常に賢慮を不死の芳香として塗布し、聖霊を香油とし、これを喜びとすべきである。3) この聖霊を、キリストは覚智ある人々にもたらした。それは芳香の油であり、天上のアロマで調合された香油である。主自らもこの香油の塗布を受けている。そのことはダビデを通じて告げられている。〈この香をもって、神は、あなたの神は、あなたに塗布を行った。あなたの輩たちにとっては喜悅の油。あなたの衣からは、没薬、ミュルラ、肉桂が香る〉(詩篇 44,8-9)。

66.1) しかしそれにしても、われわれは知らず知らずのうちに、まるでハゲタカやマグソコガネムシのように、香油を忌み嫌うことのないようにしたい(これらの動物は、バラの香油を塗られると死んでしまうと言われている)。だから女性は、男性を失神させぬように、香油を若干用いるのがよい。香油をとめどなく用いると、共棲の香りではなく、葬礼の香りを放つようになってしまう。2) またこの種の油は、蜜蜂とか昆虫の類には天敵で、人間にとっても、ある人には益となるが、人によっては闘争心を焚きつけられたり、それまで友人だったのに、劇場において香油がもとで殴り合いの大喧嘩にまで発展したりする例

もある。香油は、柔和な油ではあるが、高貴な気質を女性化させたりし得ると思わないだろうか。いかにも。3) われわれは、ちょうど味わいと食べ過ぎとを区別するように、言うまでもなく見た目とか香りとかと、放埒(hédypatheia)とを区別する必要がある。それは、これまでその行き過ぎを戒めてきた放埒に対して、知らず知らずのうちに、いわば門番のいない扉を通すかのようになり、感覚を通じて靈魂への道を備えてしまわないようにするためである。

67.1) だがもし、芳しき香りを立ち昇らせることは、大祭司である方、すなわち主を神に捧げることである(出エジプト29,18; 30,7)と言う人があるとするならば、この芳香の立ち昇りを奉獻と考えるのではなく、愛の供え物を捧げるべきなのであるから、霊的な芳香を祭壇に捧げるようにと理解すべきである。2) 実に油は、皮膚をつやつやにしたり、神経をリラックスさせたり、イヤな体臭を消したりするのに十分なだから、もしわれわれが油を必要とするにしても、そのような用途に用いるべきである。芳香を追求することは、慢心への罟であり、その慢心は欲情を次第に放埒へと引き寄せるからである。3) というのも自制のきかぬ者は、いたるところに囚われやすい。食物、寝台、お喋り、眼と耳と顎ばかりでなく、鼻からも誘惑に堕ちる。ちょうど牛が首輪や縄に引かれるように、自制のきかぬ人間は芳香や香油、それに花冠から発する良き香りに引き寄せられるのである。

68.1) しかるにわれわれは、快樂にはいかなる余地も賦与しない。快樂は人生に対して、いかなる有用な用途にも関わらないからである。そこでさあわれわれは決断し、有用性のほうを選択しようではないか。というのも芳香には、頭を重くすることもなく扇情的でもなく、交情の香りも無自制な関係の匂いも立てず、節度を伴って健康的であり、脳髓を育み、具合が悪いときには胃さえ強壮にするものがある。2) 香油の使用は、いついかなる場合にも唾棄すべきであるということではない。言わば、薬か補助財のように香油は用いるべきなのであって、萎えた力を惹起したり、カタルや冷え性、あるいは不快感にも効く。それはちょうど喜劇詩人が次のように言っている通りである。

「鼻に芳香を焚き染める。健康な香りは

脳に有用で、すごく良く効く」(アレクシ断片 195)。

3) また、香油を暖めたり沸騰させたりして樹脂状にし、脚に擦り込む療法は有効なので、よく用いられる。脳髓にすこし引きつりや減退が生じ、全身を統御しなくなったような場合にも良い。4) しかるに快樂とは、有用性とは何ら関係のないものであり、遊女のような性格を持った悪魔であり、情欲を昂じる

薬物である。香油を塗布することと、香で幻惑することとは別である。なぜなら後者は女々しい事柄であるが、香油を塗布することは、ときに有用な事柄だからである。

69.1) 実に、哲学者のアリスティッポスは、香油を身に塗りながら、香油の効用を罵り批判する「ごろつき」たちは悪人であり、ひどい滅び方をせねばならないと言っていた。2) 〈医者を尊敬せよ。自らの用のために〉(シラ38,1-2;7)。聖書は言っている。〈いと高き方は医者を創られた。主の許に癒しがある〉。続けてこう加えられる。〈香水屋は混合物を作るがよい〉、言うまでもなく、それは有用性のためにであって、香油を用いて放蕩を目的とするわけではない。3) 香油に関しては、決して煽情性を追求すべきではなく、有益性を選び取るべきである。なぜなら神はオリーブの生育に関しても、労苦の助けとなるように、人間にこれを委ねたのだから。4) ところが、無思慮な女性たちが白髪を染色し、髪を染めたために、かえって速やかに白髪になる。それはアロマが乾燥性のためである。それゆえ髪を染めた者たちは、何となくカサカサした感じに映る。乾燥は白髪を進行させる(白髪が髪の乾燥によるものであるにせよ、熱の不足によるものであるにせよ)。乾燥性が、髪本来の湿潤な滋養を吸い取り、白髪にするためである。5) だから、もしわれわれが白髪を忌避するとすれば、そのために白髪が生まれる香油を、どうして愛することが適当だと言えるだろうか。ちょうど犬が、匂いを頼りに嗅ぎ付け、獣の跡を追うように、思慮ある者は、香油の凝った匂いをもとに放埒者を駆逐するのである。

5) 花冠の使用についても同様の次第であり、浮かれ騒ぎに付き物で、酒の席に伴う。

「あっちへ行け。わたしの頭に花冠なんてまっぴらだ」

(作者不詳悲劇断片 108 かにヒト=ス初)。

70.1) というのも、春の季節には、露の降る柔らかい牧草地に、多彩な花が彩をなすが、そこにたたずむことは麗しい。それは自然でかつ簡素な芳香であり、あたかも蜜蜂を育てているかのようである。しかるに

「けがれなき牧草地の花で織り成された花冠を」

(イリピデス『ヒッポリュトス』73-74)

かぶって家で歩き回るのは賢者のすることではない。というのもバラの耳輪とか、スマイレやユリ、その他そのような花でみずらを飾って覆うのは、相応しきことではない。牧草地から花を摘み取ることになるからである。花冠をかぶると、とりわけ髪は、その湿分あるいは冷たさで活気づく。3) 一方、本性的に

脳髓が冷たいものであると考えている医者たちは、胸や鼻の頭に香油を塗ることを良いと考えている。それは、熱い蒸気が静かに昇り、冷たさを健全に暖めることができるというわけである。したがって、神経は暖められるのが望ましいとしても、花でもって脳髓を冷やすべきだというのは大いに間違っている。さらに、花冠をかぶる者は、花の魅力をも大いに損なっている。4) なぜなら、眼の上に花冠をかぶると、その美しさを愛でることができないし、その芳香をも嗅ぐことができない。花からその蒸散性を奪っているからであり、それは、芳香が上に立ち昇り、本性的に上に蒸散するからである。つまり頭の上へ、嗅がれることなく、香りは去って行く。芳香は奪い取られてしまうのである。5) その美しさと並んで、その華やかさも愛でられ喜ばせるものであり、その見栄えを通じて、その美を享受する者は創造者を誉め讃えるべきである。しかるに愛でるに際しては害が潜んでおり、速やかに過ぎ行くために悔恨とともに報いが訪れる。美しさも花も、そのはかなさから直ちに失われるものであり、双方とも移ろい行くものなのである。

71.1) だがそればかりでなく、この双方に関しては、後者すなわち花は、それに触れる者を活気づける一方、前者すなわち美しさは、燃え立たせるものである。見て享受する場合、双方とも一つのロゴスによって支配されており、それは麗しさではなく、倨傲である。われわれは、楽園にいるかの如くに(創世2,15)、聖書に従い〈在る方〉(出エジプト3,14)とともに賢慮とともに生きることが相応しい。婦人にとっての花冠は夫であり、夫にとっての花冠は婚姻であると受け取るべきである。そして婚礼の花は両者にとっての子であり、子とは、神なる農夫が肉の牧草地で摘み取ってくれるものなのである。2) 〈老人の冠は子の子であり、子どもにとっての誉れは両親である〉(箴言 17.6)と語られている。しかるにわれわれにとっての誉れは万物の父であり、教会全体の冠はキリストである。

3) ちょうど根や植物がそうであるのと同じように、花も固有の特性を有している。そのあるものは有用であり、また有害のものもあり、また危険なものもある。ツタは活気づけ、ハシバミは、その語源が明らかにするように、眠気を催させる息吹を発する。またスイセン(ナルキッス)はうっとうしい香りのする花であり、名称がこのことを証明するが、神経にマヒ(ナルク)を生じさせる。4) 一方バラやスミレの臭気は、静かで冷たく、頭痛を抑え、緩和する。われわれにあってはしかし、どうあっても酩酊に陥ることがあってはならないし、酔うことも勧められない。実に、サフランやヘンナの花は、憂いのない眠りへと導

いてくれる。5) 花の多くは、本性的に冷たい脳髓を、その臭気で暖め、脳の髄液を流れやすくする。ここから、バラ (rhodon) という名は、大いに香りを含んだ (odódés) 流液 (rheuma) を発することから与えられたと言う人もある。

72.1) しかしながら、いにしえのギリシア人の間では、花冠の使用という習慣はまったくなかった。というのも、求婚者も、豪勢な生活をしていたファイアセス人たちも、花冠を用いしなかったからだ (ホロス『オデュッセイア』第6巻)。まず初めに、競技の場において懸賞の贈呈品があり、次いで喝采の品、三番目にかんむり、そして最後に花冠となった。ギリシアでは、ペルシア戦争以降、放縦のための品としての需要が増したのである。2) したがって、御言葉に訓導される者たちは、花冠を遠ざける。それは、脳内に座を占める御言葉・ロゴスを縛りたいとも思わないし、花冠を、酒宴風の傲岸の象徴にしたいとも考えず、むしろ花冠が、偶像に献げられたものだからである。3) 実にソフォクレスは、スイセンを「いにしえの偉大なる神々の冠」(ソフォクレス『コロスのオイディプス』683 - 684) と呼んでいる。この場合の神々とは、その土地の神ということである。一方サッフォーは、ムーサ女神たちをバラで飾っている。

「あなたには、ピエリアのバラは相応しくない」

(サッフォー断片 55,2 - 3 フォイクト)。

またヘラ女神はユリを、アルテミスはテンニンカを愛でたと言われている。つまり、花が特に人間のために成ったのであるとすれば、思慮に欠けた者たちは、その花を感謝のための、固有の目的に使用するのではなく、悪霊どもに対する忘恩のつとめのために濫用してきたのである。それらは「良心に照らして」(1 コリント 10,25 ; 10,27) 認められるものではない。

73.1) しかるに冠とは、煩わされぬ不惑の象徴である。それゆえ、人々は死者にも冠を被せ、同じ論理により偶像にもかぶせるが、それは、偶像が死者に対し、業の面で追証する存在だからだという理由による。というのも、バッカイの祭祀に加わる者どもは、狂喜乱舞の祭には必ず冠を着用して参加するのである。花を巻いて身に付けた後、最後には燃やす。2) いかなる偶像であれ、これと交わってはならない。いわんや、生ける神の像に対して、死せる偶像に対するように装いを施してはならない。アマランス〔不凋花〕の美しい冠は、美しく生を送っている者にこそ冠せられるべきである。この花は、大地が容れることの叶わないものである。ただ天のみが、その実りをもたらすすべを知っている。

3) だから、主がいばらの冠を被せられたことを耳にしているのだから、主の厳粛な受難を、臆面もなく花で表そうなどというのは馬鹿げている。というのも主の冠は、予言的に、われわれが実りなき者どもであることをほのめかしているからである。われわれは教会を通して主を取り囲むのであり、教会のかしらはキリストである。そればかりでなく、これは信仰のための予型なのであって、生命に対しては樹の実体を通して、一方喜悦に関しては花冠という名称を通して、そして危険に関しては、いばらを通して表現がなされている。御言葉には、血を流さずして近づくことは不可能である。4) しかるにこのような編まれた花冠は枯れ、曲げて作った頭飾りは解け、花は萎れる。5) というのも主に信を置かぬ者たちの栄誉は枯れるからである。しかるにイエスに花冠を被せて高く挙げたのは（マタイ27,29）、自らの無学を証明する連中であつた。なぜなら心煩な者たちは、預言がこのことをたくみに語っているとは考えていなかったが、それは彼らが主の倨傲と呼んでいるものであつた。6) 迷える民は主を知らず（イザヤ1,3）、理性に割礼を施さず、闇を照らされておらず、神を知らず、主を否み、イスラエルであることを失い、神を迫害し、御言葉を侮辱することを望み、罪人として十字架に懸かつた方に対し、王として扱い冠を被せたのであつた。

74.1) それゆえ、彼らが信を置かなかつた人間、すなわち人間愛に満ちた神を、彼らは主また義なる方として認識するはずである。彼らが否定しようとした事柄は主において（※*αλκυοντις*）示され、それを彼らは挙げられた主において証したが、正義の髪飾りを、すべての名を越えて挙げられた方に、常世に緑色をした茨をもってまとうせた。2) 罌を掛けようとする者どもに敵対するこの髪飾りは、人々を阻み、教会に集う者たちには親しく生垣となって人々を守る。このような花冠は、栄光を受けた方に信を置く人々の花であり、不信なる者どもを血に染め、懲罰する。3) 実にこの冠は、主としての成功の象徴であり、彼が頭という肉体の棟梁的な部分において、われわれに棘刺した惡のすべてを取り除く。というのも主は自らの受難を通して、われわれを躓きや罪といった茨から解放し、相応しくもこう祈りを捧げて惡魔を滅ぼしたのである。〈死よ、お前の棘はどこにあるのか〉（1コリント15,55）。4) そしてわれわれは、茨からブドウの房を、柴からイチジクを摘み取る。自らの傷の中に梳き込まれるものに、主は両手を差し伸べた。それは、不従順で実りをもたらさない民のためだったのである。

75.1) ここでわたしは、また別の神秘的な事柄を語ることができる。という

のも万物を統べる万能の主は、御言葉をもって掟を定めることを始めた際に、モーセに自らの力を明らかにすることを望み、燃える柴に姿を変え、神を映す光の像となって彼に現れた。柴とは、茨の植物である。2) しかし御言葉が掟の制定を終え、人間界への訪れを済ませると、主は神秘的に、再度茨の冠を被り、そこから降下した場所へと去り、かつての降下の端緒を総括した。つまり、まず柴を通じて御言葉が顕現し、最後には茨を通じて挙げられ、すべてを通じて一なる力の業であることを示したのである。一なる父の一なる方が、世の初めであり終わりなのである。

76.1) だがわたしは、訓導の型から逸脱して、教えの姿を導入し始めてしまった。ここでもう一度、掲げておいた課題に立ち戻ることになろう。薬物としての意味において治療のために、また時には賢慮ある気晴らしのために、花の喜びや香油・蒸散物の機能も棄てるべきではないということを明らかにしてきた。2) だがもし誰かが、花を用いない者にとってなお、花の恵みとは何かと問うとすれば、香油もまた花から作られ、様々な効用があるということを知るがよい。ユリ香油はユリとリリィから作られて、熱を発生させ、発散させ、魅惑力があり、湿潤で、下剤としても有用で、微細であり、怒りを遠ざけ、鎮痛性もある。一方スイセン香油はスイセンから作られ、バラ香油と同様の機能を有する。テンニンカ香油はミルテとテンニンカから凝製されるが、身体の臭気を抑える。バラ香油は冷却性がある。3) つまり総じて、これらはわれわれが有用に用いるために創造されたのである。知恵は語る。〈わたしに耳傾けよ、流れのほとりに立つバラのように、若枝を出せ。乳香のように香りを放ち、主の業において主を讃美せよ〉(シ 39,13 - 14)。4) また、香油をめぐる御言葉は多い。われわれは花やアロマに関して、その必須の有用性について語ることができ、それらは放縱の倨傲には向かわない。5) もしすこし譲歩すべきだとしても、花の香りを享受すべきであって、花冠として被るべきではない。というのも父は、人間に対して細心の配慮を行っており、自らに固有の技巧を人間にのみ提供している。実に、聖書はこう語っている。〈水と火、鉄と小麦粉、乳に蜜、ブドウ酒の血、オリヴ油に衣類。これらはすべて、敬虔な者が善のために用いるべきものである〉(シ 39,26 - 27)。

Ⅷ. 眠りはいかに摂るべきか。

77.1) では、賢慮の教えを心に留めておき、いかに眠りに進むべきかという問

題に関して、いまや語らねばならない。というのも、宴（*euóchia*）の後、賜物を享受しえたこと、一日を駆け終え得たことに神に讃美を捧げたなら、眠りに就く前の祈りに招かれるべきだからである。豪華な掛け布団、黄金の縫い取りのあるカーペット、黄金の刺繍を施した絨毯、深紅のローブ、高価な外套、紫の詩的な毛布、上に掛けるウールの衣類、「眠りよりもソフトな」ベッド、等々については省略しよう。2) 放埒が非難されるべきことに加えて、羽毛にくるまれた布団の中で寝ることは、さながら掛け布団の柔らかさのために、身体が溝に落ち込んだようなもので、害が多いからである。というのも、眠っている人間がその布団の中で寝返りを打つ際、体の両側に山のように布団が盛り上がっているので、何も協働してくれない。また、食物が消化されるのを放棄し、むしろ燃焼させる。これは滋養を破壊するだけである。3) しかるに、柔らかい布団の中で寝返りを打つことができる者は、いわば眠りの自然的肉体訓練を受けているかのように、食物を整え、自らを環境に対してより適切に適合させてゆく。実に、銀の脚を持つベッドは、幾多の虚偽を露わにしている。そして寝台の「象牙は、靈魂を置き去りにした肉体のもので、よい装飾ではなく」（プラトン『法律』12,956a1）、聖なる人々にとって、休らいのためには愚かしき産物である。

78.1) こんな代物を熱を上げてはならない。というのも、既に持てる者に対してその使用が禁じられているのではなく、それをめぐる執着が否定されているからである。そのうちに至福はない。一方、たとえばディオメデスが眠りを貪ろうとしたのが犬のような虚栄に属するという点に関しては、

「下には野猪の皮が敷かれてあった」（ホメロス『イリアス』10,155）。

もしこれが、状況に強いられて、というのでなければの話だが。2) 一方オデュッセウスは、婚礼の寝台の不具合になった箇所を石で支えて立て直している（ホメロス『オデュッセイア』23,195 – 200）。これほどまでの慎ましさと本性的技量が、一般人のみならず、いにしえのギリシア人の指導者たちにも培われていたのである。3) この点に関して御言葉がどう語っているか、述べる必要があろうか。ヤコブは地面に横たわり（創世 28,11 – 19）、枕代わりに石を置いた。このとき彼は、人間を超えた夢を見るに値する者とされたのである。われわれとしては、御言葉に従い、簡素で慎ましかな布団を用いるべきだろう。それは、われわれに心地良さを与えてくれるものであればよい。夏なら蚊帳、冬場なら暖めてくれるものが欲しい。4) 寝台は凝ったものでなければ良い。脚は滑らかなら良い。時に、爬虫類動物の彫刻が施してあるようなものがあるが、これは

技巧に走りすぎていて、滑らかでない。5) 特に、ベッドの柔らかさは男性向けに考えられるべきである。というのも睡眠は、肉体の完全なる解放である必要はなく、休息であることが必要だからである。それゆえわたしとしては睡眠を、怠惰のためにではなく、活動の休止として摂るべきだと言いたい。

79.1) であるから、目覚めているつもりで睡眠を摂るべきである。聖書はこう述べる。〈腰に帯を締め、ともし火を灯していなさい。主人が婚宴から帰って来て戸を叩くとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ〉(ルカ 12,35 - 37)。なぜなら、眠りに堕ちている人間は、ちょうど死んでしまった人に何の用途もないように、まったく役立たずだからである。2) それゆえ夜間であろうと、しばしば寝台から身を起こし、神を讃美すべきである。神に向けて目覚めている人間は幸いである。彼らは「目覚めた存在」と呼ばれる天使たちにもなぞらえられよう。3) 「眠っている人間は、まったく何の価値もない。もう生きていない人間と何の差もない」(プラトン『法律』7.808b5)。しかるに光を持てる人間は目覚め、闇は彼を捕らえることはできないし、眠りが彼を支配することもない。なぜなら闇が支配しえないのだから(ヨハネ 1,5)。したがって、光に照らされた人は神に向かって目覚めるが、そのような人こそ生きる存在である。〈彼のうちに成ったもの、それが生命である〉(ヨハネ 1,3 - 4)。知恵は語っている。〈わたしの言葉に耳を傾ける者、またわたしの道を守り、日中にはわたしの扉を見守り、わたしが入る柱を気遣う者は幸いである〉(箴言 8,34)。

80.1) 〈われわれは、他の人々のように眠っていないで、目覚めていよう〉と聖書は語っている。〈そしてしらふでいよう。というのも、眠る者は夜に眠り、酩酊に陥る者は夜、酩酊に陥る〉。これはすなわち、無知の闇に陥るという意味である。〈しかしわれわれは、昼の子であるから、しらふでいよう。あなた方はすべて、光の子であり、昼の子である。夜の子でも闇の子でもないのだ〉(1テサロニケ 5,6 - 8; 5,5)。2) 「しかし、われわれのうちで、真に生き、またとりわけ真摯に考えることに最も心を砕く者は、できる限り多くの時間目覚めている。つまり自らの健康のために有用な時間だけをとっておく。だがその時間は、うまく習慣づけてしまうならば、決して多いものではない」(プラトン『法律』7.808b6 - c2)。鍛錬を心がけ、努力すれば、永遠の目覚めが可能になる。

3) したがって、食物がわれわれを重くするようなことのないようにし、むしろ身を軽くしておこう。とりわけ眠りによってわれわれが害されることのないようにするためであるが、それはちょうど、泳ぐ人にとって体重が重力にな

るというのと同様だからである。逆にしらふでいることは、いわば深淵の深みから、われわれを覚醒の頂点にまで持ち上げてくれる。というのも、眠りの下降性は死にも似て、思惟を無感覚へと抑え込み、まぶたを閉ざして光を遮断してしまう。4) 実に、真なる光の子らは、この光を門のところで遮断することはせず、われわれの内にまで差し込むようにし、隠されたものに対する人間の視覚を照らして、真理そのものを凝視し、そこからの流れに与かるようにする。われわれは、夢の真の姿をはっきりと、賢慮をもって明らかにしようではないか。

81.1) あくびとは、酒を飲み過ぎた者がするものであり、げっぷとは、食物不消化の者のなす業である。またいびきは布団にくるまり過ぎるためのもの、胃痙攣は胃が過重状態になった者に起こる症状である。彼らの靈魂の洞察眼は曇り、思惟が幾多の幻影で溢れかえる。2) その原因は食べすぎであり、過食は理性を無感覚へと閉ざす。「実に、多眠はわれわれの身体にも靈魂にも益をもたらさず、真理に関わる行動にもまったく適合しない、たとえ本性によるものであっても」（プラトン『法律』7.808b3）。3) しかるに義人のロトは（ここでは再生の経緯に関する説明は省く）、もし娘たちによって酩酊状態にされ、眠りに堕ちることがなかったならば、律法に反する交わりを強いられることはなかったであろう（創世 19,32 – 35）。4) だから、眠りにまで深く陥らせる諸原因を取り除くなら、われわれはより健全な状態で眠れることであろう。というのも、内在するかたちで、目覚めた御言葉を有している者が「一晩中眠っていてはならない」（ヘロス『イリス』2,24）からである。むしろ夜の間目覚めていくべきであり、とりわけ昼が陰る頃にはそうである。5) この頃、ある者はロゴスに専心し、ある者は自らの技芸に没頭すべきである。女性は羊毛つむぎに取り掛かるべきであり、いわばわれわれすべては眠気と戦い抜いて、次第次第に習慣を身につけ、できるだけ多くの時間を目覚めたままで生きることと与かるようになるべきである（というのも眠りとは、いわば徴税人の如くにわれわれの生涯の半分を割くものなのだから）。だが夜の間をほとんど覚醒のために割り、日中は眠ることを勧めるなどもののほかである。けだるさ、うたたね、まどろみ、あくびなどは、不安定な靈魂の病気だからである。

82.1) そして最後に、次のことも知っておかねばならない。それは、睡眠を必要とするのは靈魂ではなく（というのも靈魂は常に運動しているものであるから）、休息に委ねられる肉体がリラックスするのである。つまり、もはや靈魂が肉体とともに働くということがなく、自体的に思惟を始めるのである。2)

したがって真の夢とは、正当に理性を働かせている者における、しらふの靈魂の理性的活動のことであり、その際には、靈魂が身体との共感に煩わされることなく、自身のために最上のあり方で諮る。3) しかるに靈魂の破滅とは、靈魂が沈靜化してしまうことである。それゆえ、絶えざる関係のうちに常に神のことを思惟する靈魂は、身体に対して覚醒を確立し、人間を天賦的恩寵に適うものとする。その際、生命の永遠性を、覚醒をめぐる氣遣いから取り入れるのである。

X. 子孫を残すことに関して守るべきこと。

83.1) 共棲の時機は、結婚した人々のみが検討するべきことである。しかるに結婚した人々にとっての目標は子作りであり、その目的は子に恵まれることである。それはちょうど、農夫にとって種蒔きの理由が食糧の予見であり、彼にとって農耕の目的が実りの収穫であるのと同様である。2) しかるに、生ける耕地に種を蒔く農夫の方がはるかに優れている。というのも前者は、季節に応じた食糧の収穫を目指す、後者はすべてに及ぶことを考えて耕すからであり、また前者は自らのために、後者は神のために農作業に励むからである。〈増えよ〉(創世 1,28) と神は言われた。これは聴き従うべきことであろう。そして、この言葉により人間は神の似像となったのである。それゆえ人間の誕生のために、人間が協働するのである。

3) 大地がすべて、種を受け入れるのに適しているというわけではないし、たとえすべてであったとしても、同じ農夫のもとでそうであるわけではない。岩のうえに蒔くべきではないし、種すなわち誕生の始まりを画す実体を、虐待してはならない。この実体とは、本性のうえに蒔かれた理性を含む部分である。本性に基づく理性を、本性に反する道筋に置き、ロゴスに反して辱めることは、まったく神の意に反している。4) 知恵に満ちたモーセが、実りをもたらさぬ種蒔きをいかに象徴的に攻撃しているか、見てみよう。彼は言う。〈野兎もハイエナも食べてはならない〉(申命 14,7-8)。モーセは、人間がそれらの性質を分かち合ったり、同様の放埒さを享受したりすることを望まなかったのである。なぜならこれらの動物は交合に関して過度に興奮するからである。5) また野兎は、毎年放浪を盛んにおこなうと言われている。これは年毎に、生活のため掘る穴の数と同じである。こうして野兎を食用にすることを禁じ、その男色を避けるよう強調しているのである。一方ハイエナは毎年、男性性と女性性

を代えると言われている。これは、ハイエナを禁じることで、姦淫を煽ってはならないということを象徴的に表現したものである。

84.1) わたしは、いとも知恵あるモーセが、前述の禁令を通じ、これらの動物と同じようになってはならないということを明確に仄めかしたのだという点に関して、もちろん同意する。だが、象徴的に語られた事柄に対する解釈に対しては、わたしは与しない。というのも本性は変化するには決して強いられない。もっとも、一たび変化に向けて作り上げられたものは、パトス・情動のために、元に作られ直すことは不可能である。情動は本性ではないからである。情動は、形成物に対して再刻印するが、修正することはしない。2) というのも多くの鳥は、季節に応じて羽の色と声を変えられている（たとえばツグミは、黒から金色に、歌う鳥からお喋り鳥に変貌する。それと同じようにウグイスはさまざまな仕方で、羽の色と歌声を変える）。だがその本性まで変えることはない。たとえば、姿を変じてオスからメスになったりはしないのである。3) だが新しく生えた翼は、新しい衣さながらに、翼の色を染め上げて鮮やかにし、その少し後、冬の厳しさが去ると息づき始める。その様はちょうど、色が移ろい行く際の花のようである。4) 鳥の声もまた、あたかも寒さにやられたかのように枯れ始める。つまり外気からの影響で外皮が硬くなり、首のまわりの動脈が圧せられ硬化して、息をも摩擦する結果、息が過度に凝集して詰まり、響きを発するのである。85.1) そして再度、外気に同化し春に暖められて、息が狭い通路から解放され、それまで呻いていた動脈が広くなり、そこを通して息が吐き出される。そしてもはや擦れたようなかん高い調べを唄うことはなく、透き通った響きを挙げ、その声はより広やかに注ぎ出される。こうして鳥の声が歌と化し、春になるのである。

2) それゆえ、ハイエナが自らの本性を変じるといようなことは、決して信じることができない。というのも、ある人々が想定しているように、同一の動物が二つの性、男性と女性とを同時に有するということはあり得ないからである。彼らは「男女両性具有」のような奇怪な説を唱え、女性と男性の間に第三の性として「アンドロギュノス」という新奇な性を立てる。3) しかしながら彼らは大いなる迷妄に陥っているのであって、万物の母にして誕生を司る自然が技を好むということに思い至っていないのである。というのもこのハイエナは、非常に好色な動物であり、尻尾の下、排泄管の前に、いわば肉瘤のようなものが生えており、形状のうえで女性性器に似ている。この肉塊はまったく管状のものを有さず、母性器、あるいは男性性器のような、有用な器官に変貌

する。ただ内部には大きな空洞があり、排泄管が分娩の際に塞がると、転じてそこに虚しき好色を容れるようになっているのである。

86.1) 同一の構造が、ハイエナのオスにもメスにも備わっており、これがハイエナの持つ過剰な好色の原因である。オスも互いに交わるため、メスのハイエナを見ることは極めてまれである。というのも、この動物には懷妊は頻繁には起こらないが、それはこの種では、自然に反した繁殖が公然と行われるからである。2) ここからプラトンも『ファイドロス』の中で、少年愛を批判してこれを「獣愛」と呼んでいるようにわたしには思われる。すなわち、快楽に身を任せる好色者たちは「尻尾を食み」、「四足動物のように歩き、子を儲けようと試みる」(プラトン『ファイトロス』254d7; 250e4)。3) しかるに使徒も語っているように、無神論者たちを、〈神は不品行への情動に委ねた。女は自然の関係を自然にもとるものに変え、同じく男も、女との自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男同士で恥ずべきことを行い、その迷った行いの当然の報いを身に受けている〉(ローマ1,26-27)。

87.1) さて自然は、最も好色な動物に対してすら、排泄管に射精することを認めてはいない。というのも、尿は膀胱に排泄され、消化された食物は腹に、涙は眼に、血は血管に、耳滓は耳に、鼻水は鼻に下って来る。陰茎の先端には尻がつながっており、その尻を通じて排泄物が排泄される。2) わずかにハイエナの場合にのみ、自然は多彩であり、余剰の交合のために、余剰の部位を考案したのである。それゆえ、痒い部位の用途のために、空洞の部分まであり、その空洞性は、外からは見えなくしてあるのである。というのも、この部位は生殖のために創造されたのではないからである。3) かくしてわれわれには、男性同士の交合、生殖目的でない射精、逆向き交合、両性具有的交情の類が否定されるべきことは、一貫して明白であろう。これらは、自然そのものが、部位の構造からして禁じておりそれに従うべきである。自然は、精子を受け取るものとしてではなく、精子を発するものとして、男性を男性たらしめているからである。4) エレミヤは、すなわち彼を通して聖霊は、ある箇所でこう語るであろう。〈わたしの家は、ハイエナのねぐらとなってしまった〉(エレミヤ12,9; 7,11)。彼は屍からの食料を嫌悪し、知恵に満ちた寓意でもって偶像崇拜を攻撃している。なぜなら生ける神の家は、真に偶像から浄められていなければならないからである。

88.1) またモーセは、野うさぎを食べることをも禁じている(レビ11,6)。野うさぎは年中交尾しており、メスを下敷きにしており、背後から登って交尾

する。野うさぎはバック型の交尾をするからである。毎月懐妊し、二重懐妊もする（ヘマトス3.108）。交尾すると出産し、出産すると直ちに、遭遇した野うさぎと交尾する。一度の婚姻では足りないからである。さらに、乳を与えている間に懐妊する。二股構造の子宮を持っているからである。2) さらにメス野うさぎにとっては、子宮が空洞であることだけが交合に向けての賦活要因となるばかりでない（すべて空間は充溢を求める）。懐妊すると、もう一つの子宮部位が欲情に駆られて発動することになる。それゆえ重複懐妊が生じるのである（アリストテレス断片 259；260 ホーニツ）。3) こういうわけで、激した衝動や絶え間ない交合、懐妊中の交合、相恵交合、児童虐待、姦通、好色といったものを、この寓意による禁令は勧告しているのである。

89.1) こうして、この同じモーセは、もはや謎めかしてではなく、いとも明確に、核心について直截にこう禁ずる。〈姦淫するな。姦通するな。児童虐待するな〉（cf. バルナバの書簡 19.4）。御言葉による命令は、全力を傾けて守り抜かねばならない。また少しでも逸脱することがあってはならないし、掟を無視することも許されない。2) というのも、悪しき欲情の名は倨傲であり、かのプラトンは欲情の馬を「暴れ馬」と呼び（プラトン『ファドros』 238a1；254c3,e2）、「わたしにとって、あなた方は女狂いの馬になってしまった」と述べている。一方、倨傲に対する裁きに関しては、ソドムの町に臨んだ天使たちがあなた方に教えてくれるだろう（創世 19,1－25）。彼ら天使を辱めようとしたこの町の者どもに対して、彼らは町もろともに焼き尽くしたのである。これは明白な掟を記した箇所であり、好色の報いは火なのである。古の人々の過ちは、以前にも述べたように（cf. 1.2.1）、われわれが同じ過ちに囚われることなく、似たような躓きに陥ることなく掟を守れるよう、警告のために書き留められているのである。

90.1) 子供たちは息子たちであると考えるべきであるし、他の人の妻たちに対しては、自分の娘たちに向けるような目で接しなければならない。さらに、腹の快楽は制すべきであり、腹の下欲求を従えることこそもっとも肝要である。2) というのももし、ストア派の人々が一致して認めているように、ロゴスが賢者に対し、偶然に際して指一本動かすことのないように勧告しているのであれば、智慧を追求する人々が生殖器を制すべきなのは、どれほどその度合いがより大きいことであろうか。わたしには、其処が「恥部」と名づけられているのは、次の理由によると思われる。すなわち、何にも増して、体のこの部分に関して恥じらいをもって扱うべきだからであろう。3) というのも自然本

性は、食物におけると同様、掟に則った婚姻関係においても、相応しく有用で、かつ見つかわしき限りのことをわれわれに勧め、また子作りに励むべきことも勧告している。4) というのも、超過を追求する人々は、本性に沿ってのことに關しても躓き、掟に反する共棲のゆえに彼ら自身を害うのである。若者にとって、女性の性器との交わりを完全に避けることこそ、何にも増して正しきことである（プラトン『法律』8.836c2）。それゆえ、モーセに借りた哲学者はこう述べている。「決して岩や石に蒔くことはするな。そこでは、自らの子孫が根づくような本性は得られないのだから」（プラトン『法律』8.838e8）。

91.1) さて、御言葉はモーセを通じていとも明白にこう告げている。〈男と、あたかも女と寝るように交わってはならない。それは厭わしきことであるから〉（レビ 18,22）。また—自分のではなく—、「女性の畑からは、ことごとく遠ざかるべし」（プラトン『法律』8,839a2）とも麗しきプラトンは述べているが、これは神的な書から類推し、そこから掟を取り出して勧告しているものである。〈汝の隣人の妻と交わってはならない。汝の種を彼女との間で汚すことになるから〉（レビ 18,20）。2) 「側室の裔は私生であり、庶子である」（プラトン『法律』841d3）。あなたは「蒔かれたものが育つのを望まない場所に蒔いてはならない」（同上 839a2）。また「あなたの結婚した妻以外には、総じて誰にも触れてはならない」（同上 841d2）。ただ彼女だけから、正真の世代継承のため、肉の快樂を得ることは正当である。ただこれらだけが御言葉に照らして合法である。神による創造の業に与かる者は、種を放逸してはならないし、虐待してもしならない。また、非生産的なかたちで蒔くこともならない。

92.1) 実にかのモーセは、既婚の妻に關しても、もしたまたま月經の障りに当たっているなら、彼女と交わってはならないと禁令を出している。というのも身体の浄化の際に、最も生産性が高く、ほどなく人間になろうという種を汚すのは適切ではないからである。また、汚れた質料の流れと浄出により、母の畔溝での自然な誕生から種を引き離すのも適当でない。2) モーセは、いにしえのヘブライ人が、懷妊中の自らの妻と交わったという例をまったく挙げていない。たとえ婚姻關係にあっても、単なる快樂というものは律法に反し、不正かつ御言葉に反するのである。3) こうしてモーセは、夫に対し、妊娠中の妻が出産するまでは妻から遠ざけるのである。

実に、子宮は膀胱の下に位置し、直腸と呼ばれる内臓の上に広がって、首を肩の間、膀胱の中に伸ばす。首の入り口に精子が入るわけであるが、その口は塞がって閉ざされている。子宮は妊娠から解放される際に空っぽになるが、こ

うして胎児を体外に出し、また精子を容れることができるようになる。読者聴衆の便を図って、懷妊に関わる器官の名を挙げることは恥ではない。神がその器官の創造を恥とされなかったのだから。93.1) かくして、子宮は出産に渴き、精子を受け容れるが、非難されるような共棲は拒否し、精子を受け入れた後、好色に対しては口を閉じることにより、もはや完全に自らを閉ざす。それまで、愛に満ちた交合に揺れていた子宮の欲求は向きを変え、内的に出産を目的として尽力し、創造者と協働するのである。

2) すでに働きを始めている自然本性に対し、倨傲へとあおってなお煩わせることはすべきではない。この際の倨傲とは多彩な名を有して多岐にわたる。交情をめぐる無秩序の領域に逸れる場合、それは淫猥 (lagneia) と呼ばれる。これは卑しく下品で不潔であり、交合をめぐって墮してゆく。その名から明らかなどおり、これが昂じると、そこから幾多の病気の群れが出来る。それはすなわち美食、酒好き、女好き、そればかりでなく放蕩やあらゆる種類の快樂主義が生まれる。それらを僭主として支配するのは欲情である。3) これらからさらに、姉妹関係にある幾多の情動が育つ。そこからさらに、懲らしめようのない習性が頭をもたげてくる。聖書はこう語っている。〈放蕩者には鞭が、愚か者の肩には罰が準備されている〉(箴言 19,29)。放蕩の力と確固たる堪忍を「愚か者の肩」と呼んでいるわけである。それゆえ〈あなたの僕たちからむなしき望みを取り除け〉と命じられ、さらに〈不適切な欲情をわたしの前から遠ざけよ。腹を満たす欲求と性欲とは、わたしを捉えない〉(シラ 23,5 - 6) と述べられる。4) さらには陰謀者たちの悪行を遠ざける必要がある。というのも、クラテスのペラにのみならず、われわれのポリスにも「愚かな食客、尻を誇る飽食の姦通者、淫乱な詐欺女は入航して来ない」(クラテス断片 70,3 - 4)。そのような快樂の獣とは縁がない。われわれのためには、一生涯の間、価値ある行為はいくらでも見出せるのである。

94.1) さて総じて、結婚すべきか、もしくは結婚とはまったく縁なく生きるべきか(この問題もまた、探求のうちに含まれる)という件については、すでに『克己について』のなかで考えを明らかにした。だがいま、「結婚すべきか」という問題に関して再度吟味が必要であるとす。では食料と同じように、何時いかなる時でも必須のこととして性交するというのが、どうして問題なく認められようか。2)、性交 (synousia) によって、神経がまるで糸のように拡散し、語りの力強さにも影響を及ぼすのが見て取れる。実に性交は、神経がかすみを感覚器官に拡げるように、緊張をも打ち砕く。このことは、理性を持

たない動物や、肉体を鍛錬する者たちに関して明らかである。彼らのうち、競合に際して肉の交わりを遠ざけた者が、ライバルに対して勝利を収め、交合(oecheia)に曳かれた者あるいはほとんど引きずられた者が戦いに敗れる。あらゆる体力と活力を完全に吸い取られてしまうのである。アブデラのソフィスト【デモクリトス】は性交のことを「短期麻痺」と呼び(デモクリトス断片 68B32 ティールス・クランツ)、癒しがたい病だと考えている。4) すると、喪失の大きさに伴って弛緩が生起するということではないだろうか。「人間は人間から生まれ、引き裂かれる」(デモクリトス断片 68B32 ティールス・クランツ) のであるから。この損失の大きさを見よ。全人間性は、性交による喪失によって引き裂かれる。聖書はこう述べている。〈ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉〉(創世 2,23)。つまり、人間が肉体上目にされるのと同じ分だけが、精子において失われるのである。というのも、誕生の端緒は射精だからである。そればかりでなく、質料の扇動が、肉体の調和を攪乱させ打ち砕くのである。

95.1) 実に、かの高貴な人物【ソフォクレス】も、性欲にどう対処すべきかと尋ねる者に対し、こう答えている。「よしたまえ、君。わたしはそれから逃れ去ったことを、無上の喜びとしているのだ。たとえてみれば、凶暴で猛々しい一人の暴君の手から、やっと逃れおおせたようなものだ」(プラトン『国家』1,329c2)。2) だが結婚は、認められ称えられてもいる。主は〈増えよ〉(創世 1,28) と命じ、人類が増大することを望まれた。だが主は「放縦に走れ」とは言っていないし、彼らが交合の目的で生まれてきたかのように、快楽に耽ることも望まなかった。訓導者には、われわれに対し、エゼキエルを通じて叫んでもらい、辱めをしていただく。〈あなたがたの好色に割礼を施せ〉(cf. エゼキエル 44,7)。

3) 生物のうち、理性に与からない動物ですら、射精に適合した時機を持っている。本性上、子供を儲けるため以外に交合に耽ることがないようにできている。この自然本性を師として銘記する者は、時機についての賢明な教導を墨守せねばならない。この自然本性とは、老齢および若齢に関わるものであるが(ある者にはまだ認められず、ある者はもはや結婚したいと思わないという意味である)、人間は何時でも結婚したいと望むわけではない。結婚とは、子供を儲けたいという欲求であり、掟に反し御言葉に反した、精子の無秩序な分泌ではない。

96.1) さてわれわれには本性的に、欲情を初めから制御し、神的先慮によって生まれた人類を、悪しき手段による策略を用いて殺すことをしなければ、いかなる生も許されよう。この欲情は、好色のヴェールにより、ありとあらゆる

種類の破滅に向けられた破壊的薬物を用いて、胚ともども、人間愛の実を結ばせない。2) だから、結婚することが認められた者には、訓導者が必要である。一日じゅう自然本性の神秘的儀礼を捧げたり、たとえば民会や市場から朝戻ってきて、鶏のように番ったりすべきではない。祈りや読書、日中の重要な仕事をすべきときには、それに専念すべきである。夜には、宴に与かり享受し得たものに対する感謝の後は、休むのが相応しい。

97.1) 自然は、結婚による営みを遂行するための時機を、常に与えてくれるわけではない。それに、より時間をかけた交情のほうが望ましい。夜だからといって、闇の中のように放縱に走ってよいというわけでは決してなく、理性の光同様、靈魂には慎しみを留めておかねばならない。2) というのもわれわれは、機を織るペネロペイアと何ら異なるところはない（ホロス『オデュッセイア』2.104－105）。つまり、日中は賢慮の思いを織りなし、夜にはほどこいて、寢床に就こうではないか。もし真摯さを見せねばならないのであれば、不品行な交情を避けることによって、自らの妻に対して一層の真摯さを示すべきである。そして隣人の女性たちに対する浄らかさに裏打ちされた信仰が、家庭で成立するようにせよ。3) というのも、その女性において、あの激しい快楽の中で証人となる真摯さが実証されぬような場合、その女性から真摯であると考えられることはありえないし、また真摯でもない。好意はしばしば、交情をおこなうことに向けて破滅的に進むが、その花が咲くのは短時間であり、身体とともに老い行く。だがときに先に欲情が枯れてしまって急速に老いる。それは、結婚に関わる節度を遊女的な快楽が踏みにじる場合である。なぜなら愛欲に堕ちている者の心は翼を有し、魅力は悔恨とともに消え行き、愛情はしばしば憎悪へと変じ、非難の怒りが感じられるようになるからである。

98.1) 放埒な言葉、不品行な姿態、遊女的な接吻、あるいはそういった類の好色の名前に関しては、幸いな使徒に信を置く者には、ここで述べる必要はあるまい。使徒はこう明確に述べている。〈あなた方の間では、聖なる者にふさわしく、淫らなことやいろいろの汚れたこと、あるいは食欲は、口にしてはならない〉（1コリ5,3）。ある人は巧みに語っているように見える。「性交は何の利益もないが、害を与えなかったのなら許されるべきだ」（1ピクロス断片 62；ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』10.118）。というのも、性交は、子作りに関わるものでない限り、掟に適用場合でも躰きのもととなるし、掟に反する性交については聖書がこう述べている。〈遊女は唾をかけられて当然、夫のある女性は、交際する男性にとって死の塔に等しい〉（シ26,22）。3) 遊女へ

の情愛は野猪か豚になぞらえられ、遊女として囲われている女との姦通は死に値すると言われる。

99.1) さて、人々の放蕩がはびこる家や都市は、あなたがたの生んだ詩行がおよそ次のように記して難詰している。

「あなたの許には姦淫があり、男性との掟に悖る交わりがある。

女装の男、不法者、悪しき都市よ、すべてにおいて不浄なる者よ」

(『シヰュラの託宣』 5.166 – 168)。

2) さらに節度ある者たちは讃嘆的となっている。それは

「他人の寝台の上に恥ずべき欲望を持たず、

男に対して呪わしく忌まわしき倨傲を抱かない者たち」

である。なぜなら、ここで呪詛されている者どもは、自然に反した衝動を抱いているからである。多くの者たちはこれらを放縦と解する。これは彼ら自身の罪である。一方彼らよりも理性的な者たちは、これらが罪であると認識しているが、快楽に打ち負かされてしまうのである。

3) 彼らにとっての闇とは、情動の覆いである。自らの結婚に対し、遊女のような扱いをする者は、自らの結婚に対して姦淫を犯しているのである。彼には、次のように叫ぶ訓導者の声が聞こえていない。〈自分の寝床を抜け出す男は、心の中で言う。「誰が見ているものか。周りは暗闇だし、壁がわたしを隠している。誰も見ていない。何を恐れる必要があるうか。いと高き方は、わたしの罪など少しも気には留めない」〉(シラ 23,18 – 19)。4) この男は最高に憐れな者であり、人の目だけを恐れ、神の目を免れていると信じ込んでいる。聖書は語る。〈彼は知らないのだ。主の目は、太陽よりも一万倍も明るく、人間のすべての歩みを見極め、隠れた部分までも見通すということを〉(シラ 23,18 – 19)。5) 次いで訓導者は、彼らに対してイザヤを通じて威嚇する。〈災いだ、秘かに企みをめぐらし、こう言う者は。「誰がわれわれを見ているだろうか」〉(イザヤ 29,15)。人によっては、おそらく知覚しうる光を免れる者はあるかもしれないが、思惟的な光を免れることは不可能である。それはヘラクレイトスが次のように述べている通りである。〈沈まないものを、誰が知らずにいられようか〉(ヘラクレイトス断片 81 マルコヴァイチ; B16 デイルス・クランツ)。6) だから、われわれは決して闇を覆いつくすことはできない。なぜなら、光はわれわれのうちに住んでいるのだから。〈闇は、この光を捕らえ得なかった〉(ヨハネ 1,5)。夜は賢慮ある理性に対しては光をもって輝く。聖書は、善き人の理性を「眠りを知らぬ灯火」と呼んでいる(知恵 7,10)。

100.1) ところで、自分が為す事柄について人の目に触れないように努めるというのは、罪を犯していることを認める人間の仕業である。すべて罪を犯す者は、直ちに不正を犯すわけであるが、姦通を犯す者は、隣人に対してというよりも自らに対して姦通を犯したことになる。というのも罪を犯す者は、罪を犯す限りにおいて、本来の自分自身よりも劣り、価値を乏しくするからである。こうしてすでに、恥ずべき快樂に打ち負かされたということに加えて、放縱の度合いが増している。それゆえ姦淫を犯す者は神において死に、御言葉によって置き去りにされる。その様はまるで、死人が息吹に見放されるのと同様である。2) 聖性を汚すことは、当然のことながら忌み嫌われる。しかるに、浄らかなものに接することは、常に浄らかなものに許されることである。衣を脱ぐとき、われわれは慎みまでも脱ぎ捨ててはいけない。なぜなら義しき者にとって、節慮を脱ぎ捨てることは許されないからである。見よ、尽きることを知らぬ欲情が放縱に向けて流れようとも、克己によって訓導を受け、腐敗を受けぬものとなれば、この腐敗したものが非腐敗性をまとい、永遠の節慮へと人間を引き入れるのである。3) 〈というのもこの世にある者は、娶ったり嫁いだりする〉(肋20,34)。だが肉の業を閉ざし、浄らかな肉のうちに非腐敗性をまとい、天使の境位を追求しようではないか。4) かくして、異教の哲学の徒プラトンも神秘的に、『フィレボス』篇において、自らのうちに住まう神すなわちロゴスを蔑ろにする者ども、そして情動に引きずられるままに自らのうちなるものを汚す者どもを、「神を知らぬ者」と呼んでいる。

101.1) であるから、神において聖化された者は、もはや決して死すべき生き方をしてはならない。これはパウロが述べているとおりであり（1コリント6,15；19）、キリストの身体を娼婦の身体にしてはならない。また神の神殿を、恥ずべき情動の神殿にしてはならない。2) 姦淫の廉で突き刺された2万4千人の女のことを覚えているだろうか（民数25,9）。すでに述べたように（『バイダゴゴス』2,89,3）、姦淫を犯す者のこうむる災いは、われわれの情動を教導する範型（typoi）なのである。しかるに訓導者は、われわれに対していとも明瞭にこう勧告している〈欲情の後を歩むな。欲望から身を遠ざけよ〉（シラ18,30）。〈酒と女は、聡明な者の思慮を奪い、娼婦に溺れる者は、ますます向こう見ずな人間となる。腐敗と蛆虫が彼を嗣業とし、彼はより大きな恥のうちに身をさらす〉（シラ19,2－3）。さらに（彼は疲れを知ることなく助けの手を伸べる）、〈しかるに、快樂に抗する者は、おのれの生に冠を被せる〉（シラ19,5）。102.1) 性欲に打ち負かされることも、欲情のために虚無に陥ることも

正しくないが、非理性的な欲求に打ち負かされることも、身を汚したいと望むことも正しくない。ただ結婚した男性のみに、ちょうど農夫と同じように、種を蒔くことが許されているのである。時が満ちたとき、その種を時機が受け取るのである。

2) それ以外の無自制に対しては、御言葉が最上の薬である。だが満足に行き着かぬことも助けになる。この満足によって炊きつけられた欲情が、快楽を求めて跳躍するのである。だから、高価な衣を求めるべきではない。それはちょうど、さまざまな食料を求めるべきでないのと同様である。3) 実に、主が自ら、靈魂と身体、それに第三にはそれ以外の部分に対して教えを分かっている。まず身体のためにはそれ以外のものが供給されるように勧め、身体には靈魂のために統御し、靈魂に対しては次のように教導している。主はこう言われる。〈あなた方の靈魂において、何を食べようかと思ひ煩うな。身体に関しては何を着ようかと悩むな。靈魂は食料に優り、身体は衣類に優るからである〉(マタイ 6,25; ルカ 12,22 - 23)。4) さらに主は、この教えのための明確な範例を付言する。〈空の鳥を見よ。彼らは蒔くことも刈り入れることもしない。彼らには蓄えも倉庫もないのに、神は彼らを養っていてくださる。あなたがたは鳥に優るものではないか〉(ルカ 12,24)。

5) 以上は食料に関する事柄である。同様に衣類に関しても主は勧告している。それは第三の点、外的なものに関わる。主は言われる。〈野の花のことを考えてみよ。働きもせずつむぎもしない。あなた方に言うておく。ソロモンでさえ、これらの花の一つほどにすら着飾っていなかった〉(ルカ 12,27)。だが王ソロモンは、自らの富のことを大いに誇りにしていた。103.1) 一体、花よりも季節に適い、華やかに咲き誇るものがあるだろうか。ユリやバラよりも喜びに満ち溢れるものがあるだろうか。〈今日は野にあり、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装っていて下さる。あなたがたはそれにどれほど優るものだろうか、信仰の薄い者たちよ。だからあなた方は何を食べようか、何を飲もうかと問うべきではない〉(ルカ 12,28 - 29; マタイ 6,30 - 31)。2) ここで、この「何」という表現が、食料の多彩さを排除している。聖書の意味はこうである。どのようなものを食べ、どのようなものを飲もうかと思ひ煩うな。そんな風に思ひ煩うのは、貪欲であり放縦である。ただ「食べる」ということだけが、単純に考えられた証拠であることが必然である。それは、言うなれば不足分の充溢ということである。しかるに「何」ということは余剰分であり、悪魔による余剰であるということを、聖書は告げている。次に付加された句がその意味

を明らかにしている。主は〈何を食べようか、何を飲もうかと問うべきではない〉と言いつつ、こう加える。〈思い悩むな〉(ルカ 12,29)。倨傲と放縦とが、真理から遊離した者を生み、余剰分へと煩わせる贅沢が真理から逸らせるのである。4) それゆえ主はいとも美しくこう言われる。〈これらはすべて、世の民が求めるものである〉(ルカ 12,30; マタイ 6,32)。ここで「民」とは無秩序で無思慮な者のことである。「これら」とは何のことを言っているのであろうか。それは放縦、奢侈、馳走、美食、暴食である。5) この「これら」こそ「何」なのである。純然たる食料、すなわち乾物や湿潤な食物は必需品であり、こう語られる。〈あなた方の父は、それらが必要であることをご存知である〉(ルカ 12,30 - 31; マタイ 6,32 - 33)。もしわれわれが悉く探求者となるのであれば、捜し求めたものを放縦に消尽するのではなく、真理の発見のために灯そうではないか。主は言われる。〈神の王国を捜し求めよ。食料はそれに添えてあなた方に与えられる〉(ルカ 12,30 - 31; マタイ 6,32 - 33)。

104.1) したがってもし、衣類や食料その他のものに関する思い煩いを、総じて不可欠のものではないとして取り除くなら、おしゃれ好きや羊毛の染色、多彩な色、あるいは手の込んだ石細工や金細工、髪結いの技や仕上げ、髪編み方、さらに加えてはアイシャドウ、髪間引き、頬紅、おしろい、ヘアダイ、あるいはこれら迷妄に関わる悪しき技術について、主がどのように語っているかを見る必要があろう。2) 次の問題は太に検討する必要がある。すなわち、草に関して少しく前に述べたことが、これらの無秩序なおしゃれ好きについても語られるのではないだろうか。3) 〈世とは畑であり〉(マタイ 13,38)、神の恵みに潤うわれわれは青草であって、刈り取られて再び芽吹く。このことについては『復活について』においてより広範なたちで説明されるであろう(cf. 1.47.1)。しかるに、草とは一般の大衆がほのめかされたものであり、一日だけの歓喜に固執し、束の間だけ花を咲かせ、真理を愛するよりも、すべてにおいて装飾を好み虚栄をいとおしんで、何にもまして火の炎に投げられるに相応しい存在なのである。

105.1) 主は解説を施しつつこう語る(ルカ 16,19 - 23)。〈ある非常に富裕な人がいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日派手に遊び暮らしていた〉。この人物こそ草である。〈この富者の門前に、ラザロという名の貧者が横たわっていて、富者の食卓から落ちるもので腹を満たしたいと欲していた〉。この人物こそ青草である。冥界で懲らしめを受け、火に投げ入れられたのは、富者の方であった。一方貧者の方は、父のふところへと上げられた。2) わたしは、

スパルタ人たちの建てたいにしえの都市に讃嘆する。わずかに遊女にのみ、花柄の衣服と金色の装身具をまとうことが許され、身分ある女性からは装飾熱を奪い取り、遊女にだけ化粧することが許可されたのである。3) 逆にアテナイのアルコンたちは、都会風の生活様式を熱求し、男の館であることを忘れて黄金の装身具を装い、足まで届く長衣をまとい、髪結いの一種であるポニー・テイルに編み上げ、黄金のセミのブローチを身につけている。彼らは大地の産物が、真に審美眼のなさによる不自然な贅沢であることを実証する。5) だが、これらのアルコンたちの嫉妬心は他のイオニア人たちにも浸透していて、ホメロスは彼らを女々しい存在と見なし「裾を引きずる者たち」(ホロス『イリアス』6.442)と呼んでいる。

106.1) おしゃれ好きは、美そのものではなく、美の幻影を崇拜する者であり、再び相応しき名を用いるならば「偶像崇拜者」であって、真理からは遠く排斥すべきである。彼らは、知ではなく見せ掛けの栄光でもって、美の本性を夢見ているのである。2) 彼らにあってこの世での生は、無知による深き眠りである。われわれはこの眠りから目覚め、真に美なるもの、品位あるものに向けて尽力し、それだけを掴むべく努力せねばならない。その際、完全に眠りに堕ちるよりも前に、この世での装飾的なものに対し、この世において喜びを見出すことを放棄する必要がある。3) わたしとしては、人間は他ならぬ身体にまとう覆いとして、衣類を必要とするのであると言いたい。それは、過度の寒さや厳しい暑さから身体を守るためであり、大気の不順がわれわれを悩ませないようにするためである。

4) もしこれが衣服の目的であるとすれば、男性用の特別な衣服というものはないのに対して、女性用に特別に定められた衣類があることに注意したい。身体を覆うということに関しては、食べたり飲んだりすることと同様、両性にとって共通である。107.1) つまり用途が共通であるために、われわれは衣類に関して同様のつくりを認めている。覆うものが必要であるという点が、両性双方に共通であると同様に、覆う部分が両性双方に共通である必要がある。もしそうでない場合には、女性の目をさえぎる用途の覆いを用いなければならない(※イリア語訳に従う)。2) いま、女性の方が弱いために、より多くの物を必要とするのだとしよう。悪しきしつけによる習慣に帰せられるべきものであるが、しばしば、下劣な生活様式のもとに育てられた男性は、女性よりも女性っぽくなってしまふ。この説の力に屈してはならない。3) 一方もし、少しばかり譲歩せねばならないとすれば、彼女たちに、より柔らかな衣類を用いる必要

があると認めざるを得ない。ただ、微細を尽した労作や、網状に織り成した掛け布などは除外するとして、金のつむぎ糸やインドのシルク、贅を尽した絹などを喜ぶことは容認するのであろう。4) まず蚕が育ち、その後そこから粗野ないもむしが現れ、その後第三番目の変身として、蛾の幼虫が新たに誕生する(ある人はこれを若虫^{キダグロン}と呼ぶ)。これから長い絹糸が生み出される。その様は、まるで蜘蛛の巣が蜘蛛から出てくるのとそっくりである。5) この余分で透明な物質こそ、先の考えが力を持たないことの証左となる。ほんのわずかな布でもって、身体の恥部を売り飛ばすのである。というのも、女々しい衣服は覆いではない。裸体の形状を隠すことができないからである。そのような衣服は刺激的で、身体そのものに合わせてごく柔らかく形作られ、身体に吸い付くように肉感的に織り上げられている。その形状は女性の形を模倣しているため、見るものには身体の状態が完全に明らかになるのである。

108.1) 衣服からも染料は排除すべきである。染料は、必要からも真理からも程遠く、品性についての中傷が生まれるからである。その使用は有益ではなく(寒さには適さない)、覆いとしても、他の衣類に比して何ら増し加わる部分がなく、単に非難を招くだけである。そして色の快活さは、無思慮な眼には刺激的で食欲な者を悩ませる。色白で内面に偽りのない者は、白色で凝っていない衣をまとうのが最も調和している。2) 実に、預言者ダニエルが明白かつ淨らかにこう述べている(ダニエル7,9)。「王座が据えられ、「日の老いたる者」がそこに座した。彼の衣はあたかも雪のように白かった」。3) 彼は、そのようなストラをまとった主を幻のうちに見る。また『黙示録』はこう語っている(黙示6,9; 11)。「わたしは祭壇の下に、殉教して証しを立てた人々の靈魂を見た。彼ら各々には白い衣が与えられた」。4) だがもし、他の色をも用いる必要があるのなら、真理のおのずからなる染料を用いるべきである。花に似た服は、パッコス秘儀や怪しい狂乱のためにとっておくがよい。さらには、喜劇詩人が言っているように、「紫色やイミテーションの銀色は、悲劇役者に有用で、生活には必要ない」(フィルム断片105.4-5)。しかるにわれわれの人生は、派手な行列に完全に優るものでなければならない。5) サルデスその他のブドウ色の染料、他の青白い色、ばら色、深紅、その他幾千の色の染料は、破滅をもたらす放縦によって必死に考案されたものである。

109.1) このような衣服は、覆いのためではなく、見せるためのものである。黄金をあしらったもの、紫色に染めたもの、像の縫い取りをしたもの(これは風になびかせて誇る呈のものである)、あるいはサフランの香を焚き染めたも

の、全面に皮が見える高価なジャンパーなど、紫でそめた像が描かれており、その技巧を愛でるのは良しとせねばならない。2) 喜劇ではこう歌われている。「わたしたち女は、座って、どんな賢い、ないし輝かしい事ができるのでしょう、花柄の縫い取りをして、サフラン染めにして、お化粧をする以外に」

(アリストファネス『女だけの祭り』42－44)。

3) 訓導者は明確にこう勧告している。〈身につけている服を誇るな。栄誉を受けるときでも、おごり高ぶるな〉(シラ11,4)。そして柔らかな衣類をまとっている者たちを見た訓導者は、福音のなかでこう述べる。〈見よ、華やかな衣を着て、贅沢に暮らす人が宮殿にいる〉(ルカ7,25)。これは世の宮殿、滅び行く宮のことを指している。そこには、美の虚偽、栄誉欲、追従、迷妄がある。しかるに天上の宮廷で万物の父の傍に仕える者たちは、靈魂の汚れなき衣、すなわち肉において聖化されており、こうして不腐敗性をまとっているのである。4) ちょうど結婚していない女性が、ただ神のためだけに時間を用い、彼女の思いが引き裂かれることがないのに対して(1コリント15,53－54)、結婚していて賢慮ある女性は、人生を神のため夫のために分かち。だが他の女性は、生のすべてが結婚生活、すなわち情動のために費やされる。思うに、ちょうどこれと同じように、賢慮ある女性は偽りなく敬神の念持つ夫のために時間を割くが、おしゃれ好みの女性は、神からも賢慮ある結婚生活からも脱落し、夫と引き換えにおしゃれを獲る。そのさまはちょうど、アルゴスの遊女、すなわちエリフュレと同様である。

「彼女は愛しい夫に換えて高価な黄金を受け取った」

(ホメロス『オデュッセイア』11.327)。

110.1) 同じように、ケオス島のソフィスト【プロディオコス】も、似ている対応物ながら非なる女神、美德と悪徳の像を描き出しているのを知っている(クセノフォン『ソクラテスの思い出』2.1.21－34)。彼女たちのうちまず、美德の方を、彼は質素に立つ姿で描いている。彼女は白い腕をした淨らかな女性で、恥じらいの念だけで身づくろいをしている(信心深き女性は、恥じらいを伴い徳に満ちたそのような者でなければならない)。一方、彼はもう一人の女神、悪徳を導入するが、こちらは豪華な衣服をまとい、異様な色で磨き上げている。彼女の動きと身のこなしは優美さを追求したもので、好色な女性のモデルとなっている。2) だが徹底して御言葉に付き従う者は、恥ずべき快樂には決して与しない。それゆえ衣服に関しても必要性を優先させるべきである。御言葉も、主に

関してダビデを通じ、次のように奏でている。〈諸国の王女たちは、あなたへの敬意のうちにあなたを讃える。王女はあなたの右手にあって、黄金の衣と金の縁飾りを身にまとう〉（詩篇 44,9 – 10 ; 14）。ここでは放埒な衣類が語られているのではなく、信仰によって織り成され、憐れみ深き者たちによる淨らかな教会の飾りが明らかにされている。その教会にあっては、企みなきイエスが〈黄金の如くに輝き〉（ピントロス『オリュンピア祝勝歌』1.1）、金の縁飾りとは、選ばれた民を表す。

111.1) さて、女性たちのために緊張を緩める必要があるのなら、手ざわりがスムーズでソフトな衣服を織り成す必要があるが、絵画のように、見た目が喜ばしくなるべく花柄にするのは良くない。絵画は時間とともに色あせるが、洗濯や縮みが染料の薬分の香りに溶け出して、弱い機織り部分を含む羊毛を完全なものとする一方、全体はその経緯にうまく順応しない。2) しかるに最大の無趣味は、生地、長衣、外套、それにクローク、キトーンに対して、過度にびっくりすることである。ホメロスが言うように、それらは「恥部を覆い隠している」（ホロス『イリアス』2.262）もののなだから。実際、恥部の覆いにあまりに多額の富が注がれているのを見ると、本当に恥ずかしくなる。3) というのも楽園に住まっていたいにしえの人間は、イチジクの枝と葉で恥部の覆いを綴り合せたのである（創世 3,7）。いまや、われわれのために群れが形作られた。これはわれわれが、羊の群れと同じように、愚かしく振舞うことなく御言葉によって教育され、衣類の奢侈を反駁し、たとえミレトスが誇ろうと、たとえイタリアが誉めそやされようと、たとえ髪が皮で守られようと、「お前たちは羊の毛だ」と言われるためである。髪の毛とは、多くの者がそれに狂うものだが、われわれは決してそれに執着してはならない。

112.1) さて、幸いなる洗礼者ヨハネは、羊の毛に関する奢侈がはびこるのを超然と座視し、駱駝の毛を選んでこれをまとい、質素にして偽りなき生をかたどる者となった。彼は蜜とイナゴを食した。これは甘美にして霊的な食料であり、彼は、傲慢に陥ることなく賢慮に満ちた形で主の道を整えたのである。2) もし彼が、政治的な倨傲の道に向かっていたら、紫衣の外套をまとっていたかもしれない。だが彼は荒れ野に隠遁し、砂漠の静けさのうちに、あらゆる虚しき煩い、愚かしき行い、卑しさから離れて神とともに生きた。3) エリヤは山羊皮の衣をまとい、腰には帯として皮帯を締めていた（列王上 19,13 ; 列王下 1,8）。一方イザヤは、このようなタイプのもう一人の預言者で「裸足で履物も履かず」にいた。そして謙遜の外衣として皮袋を担いでいた（イザヤ

20,2)。113.1) もしエレミヤをも招くのであれば、この男は麻の帯だけを持っていた。もし肉体の立派さが露わにされるならば、その力をより明らかに示すのと同様に、品性の美しさも、粗野な愚かしさに包まれていない形で示されるのである。

2) しかるに足の先まで下りた服を引きずるのは、まったく無作法であり、闊歩するためのエネルギーにとって障害となり、まるで箒のように服が大地の表面のほこりを掃き寄せることになる。あのパントマイムの放埒な演技を舞台の上で展開する踊り手たちすら、これほど墮落してはおらず、ここまで尊大に墮した服装を蔑視する。手の込んだ彼らの装束や、ずり下がったマント、凝った仕草のリズムは、つまらない弛緩をむしろ軽蔑していることを表しているではないか。3) たとえ誰かが、足まで届く主の衣（黙示 1,13）を提示しようとして、かの多色の花をあしらったキトンは、知恵の華、すなわち多彩にして枯れることのない諸書を示しており、これは真理のきらめきをもって輝きを放つ主の御言葉である。4) 聖霊はダビデを通じ、そのような別の衣を主にまとわせている。その詩篇はおよそ次のように奏でる。〈わたしは衣として光をまとい、讚美と威厳を身に帯びる〉（詩篇 103,1－2）。

114.1) かくして、衣類のつくりは、あらゆる新奇さとは無縁であることが求められるが、ちょうどそれと同じように、衣服の用い方に関しても無節度は用心せねばならない。ラコニアの娘たちのように、ひざ上までの装いをするのは美しくないとされている。体のどの部分であれ、肌を見せることは女性には適切でないからである。2) たとえば「腕がきれいだね」と言う者に対して、「でも見せないの」というような、気の利いた反応を上手にすることはできよう。それは「脚がきれいだね」に対して「でもわたしの夫だけのものよ」、あるいは「かわいい顔してるね」に対して「でも結婚してるから」といった対応にも言える。3) しかしわたしとしては、節度ある女性たちには、そのようなほめ言葉の発端を、ほめ言葉でもって軟派するような男どもには提供しないことを望む。だからこそ、くるぶしを露わにするのをやめるばかりでなく、頭を覆い、顔にもヴェールを被せることが義務化されているのである。というのも、身体之美しさが人間にとっての罠であるというのは、敬虔な状況ではないからである。4) また女性が紫の掛け物を用いて周囲から注目されることで、賢明な女性とされることを望むということも感心できない。願わくは、衣類からは紫色を排し、着ている女性の顔に衆人の目が向かわないようになれば、と望みたい。また、いまショールを織り上げている女性たちは、今後、全体を紫色に仕立てて怠惰を

あおるようなことのないように願いたい。けれども、この愚かしく優雅な紫色に夢中になっている女性たちに対しては、かの詩行に語られているように、「紫色の死が捕らえる」（ホロス『イリス』5.83）。

115.1) この紫色のために、テュロス、シドン、そしてラコニア海に面する都市が最も願わしいとされている。それらの町々では、染物師や紫貝猟師、あるいは二枚貝そのものが大いにもてはやされるが、それはこの貝の血が紫色を産出するからである。2) だが贅沢な口ウブをまとった偽り深い婦人たちや、男どもの中でも女々しい連中は、虚偽の染料を無節度に狂い求め、もはやエジプト輸入の布や、ユダヤあるいはキリキアの土地から出る他の生地を求めることがない。ゼニアオイの茎や亜麻布については触れないことにする。放埒さのほうか、名称を上回っているのだ。3) しかしわたしが思うに、覆いのほうか、覆われるものを、自らより優れたふうに見せるべきだと考える。たとえば神殿が像を、肉体が靈魂を、衣服が身体を覆う場合がそうである。4) だが今の場合、事態はまったく逆である。彼女たちの身体が売られたとすると、値は1000アッティカ・ドラクマにも及ばないであろう。1000タラントンの衣服一着を買いながら、彼女たちは自らを、衣類よりも無益で無価値なものであることを証明しているのである。5) いったい何故、稀にして高額なものを、内側にあるものに代え、また容易に入手しうるものの代わりに追い求めるのであろうか。それは、真に美しきもの、真に善きものを知らないからである。また真に存在するものではなく、見せかけだけの存在が、無思慮な者たちによって追求されるからである。彼らは狂人にも等しく、白いものを黒いと幻想しているのである。

XI. 履物について。

116.1) 履物に関しても、女性たちの愚かしさは同様であり、ここでも大いに柔弱さを露わす。金色の花をあしらったサンダルなどは実に恥ずかしい。そればかりでなく、彼女たちは、ビョウをらせん状に靴底に打ち込むのを良しとしている。彼女たちの多くは、それらに愛欲的な抱擁を彫り込んでいて、歩くたびに大地にリズムを響かせ、思いが遊女的であることを、靴音で印象づけている。2) サンダルに金メッキを施したり、象眼細工したりする虚芸、それにアッティカのハーフ・ブーツ、シキュオーンのブーツ、それにペルシアやティレニアのロング・ブーツを喜ぶことに関しては、容認せねばなるまい。しかしながらわれわれの真理にとっての慣例に則り、正しき指針を打ち立て、本性に合っ

たものを選ばねばならない。というのも履物の用途というものは、足を保護すること、躓くのを防ぐこと、ごつごつした山道から足の裏を守ることだからである。

117.1) 女性には、白い履物を認めるべきであろう。ただし長旅に出る場合は別で、その際にはトレーニング・シューズのようなものを用いるべきだろう。旅に出る場合には、靴底をジョウで留めたものが必要となる。ただそれ以外の場合、婦人は履物を用いるべきである。裸足のままでいるのは適切でない。とりわけ女性は滑りやすく、怪我をしやすい。2) 一方男性は、裸足のままでいても結構だろう。ただ行軍する場合は別である。「履物を履く」(hypodesthai)は「縛る」(dedesthai)に何となく近い。裸足を用いることは鍛錬には最も効果的であり、健康にも心地良さにも適している。だから何人もこれを妨げることはすべきでない。3) だがもし長旅をするのでなく、また裸足でいることにも耐えられない場合には、スリッパもしくはつまみかけを用いるのが良い。アッティカ人たちはそれをコニポデス（半スリッパ）と呼んでいる。これは両足に塵(konis)がかかるからだろうとわたしは思う。4) 簡素な履物の証人は、洗礼者ヨハネだけで十分であろう。彼は、自らが主の履物の紐を解く資格もないと認めた(ヨハネ1,27)。真の愛智の予型をヘブライ人たちに示したこの人は、何ら余計な履物を身につけていなかったからである。この点が何かを仄めかしているのかどうかについては、他の箇所でも明らかにされるであろう(『ストロテイス』5.8.55.1 - 2 参照)。

XII. 石と金の飾りに囚われてはならないこと。

118.1) さて、青色や藍色の石、あるいは外国の海の浜辺の石、また大地の一片などを讃嘆するのは、子供じみた趣味である。というのも水晶の輝きや独特の色彩を、多彩なガラスに仕立てるのは、印象的な幻影を持つものに惹きつけられただけの、無考な人間の仕業だからである。2) 火を見た子供は、輝きに惹きつけられてその火の方へと近づいて行く。だがそれに触れるのが危険であるということについては、無考なために気づきもしていない。3) それと同じような次第で、愚かしい女性に愛でられた石が、首飾りやネックレスに埋め込まれる。それはアメジスト、ヘリオトロープ（血石）、碧玉、トパーズなどであり、あるいは

「ミレトスの

エメラルド、最も貴重な商品」（作者不詳喜劇断片 1218）。

しかるに非常に貴重なパール（真珠）は、女性の部屋には圧倒的に乱入している宝石である。この宝石は甲殻類に似た牡蠣のようなものの中に生じ、その大きさは、大きめの魚の眼ほどである。5) さらに、悪霊に取り付かれた女性たちは、恥ずかしげもなく、わずかな牡蠣にこの宝石を作ろうとあらゆる努力を傾ける。だが彼女たちは聖なる石、聖書がある箇所では（マタイ 13,45 - 46）「真珠」と呼んでいる神の御言葉で、身を飾ることができる。この真珠とは輝かしく淨らかなイエス、肉のうちに監督者である眼、透き通ったロゴスである。この御言葉を通して、肉は貴重なものとなり、水から生まれたのである。というのもこの牡蠣は水のうちに成り、肉をまとい、この肉に真珠が宿ったからである。

119.1) ところでわれわれは、天上のエルサレムが聖なる石の城壁で囲まれていると教わっている。そして宝石になぞらえられた天上の都市の十二の門は、使徒によって告げられた恩寵の顕現を比喩的に表現したものだと理解している（黙示 21.18-21）。なぜなら高価な宝石の上には彩色が、その色彩もきらびやかに施されているが、それ以外の材質は地上的なまま残されているからである。2) これらでもって、相応しくも象徴的に、靈的に建設された聖者たちの都市に城壁が施されているのである。さらには、比類のない宝石の輝きは、染みのない霊の輝きとその内実の聖性だと考えられている。しかるに、聖書の象徴的意味を理解しない女性たちは、宝石類に全身全霊呆然となり、かの驚くべき弁明を持ち出すのである。「神が示してくださったものを、どうしてわたしたちが用いていけないことがありますでしょうか?」「わたしの持ち物を、どうして誇っていけないことがありますでしょうか?」「これらのものは、わたしたち以外の誰のためにできたのでしょうか?」3) このような声は、神の意図をまったく理解していない者のものである。まず、たとえば水や空気のような必須の物質は、万人に明らかなたちで供される。しかるに必須でない物質は、大地や水のうちに隠される。120.1) それゆえ、蟻は黄金を掘り、グリフィンは黄金を抱き、海は真珠石を隠すのである。

あなた方は、必要でない事柄に対して、躍起になっている。見よ、天はすべて開かれている。それなのに、あなた方は神を探そうとしない。隠された金や石の類は、死に定められた者どもがあなた方の（※*ゲイモガイツ*の読みに従う）許で掘り探すものなのだ。2) だがそれだけでなく、聖書を反唱してみるがよい。聖書は次のように明白に叫んでいる。〈まず天の王国を捜し求めよ。それ以外のものはすべて、それに添えてあなた方に与えられる〉（マタイ 6,33）。けれ

ども、もしすべてがあなた方に賜物として与えられ、すべてがあなた方に委ねられ、そしてもし、使徒が語るように〈すべてがわれわれに可能である〉(1コリント10,23)としても、〈すべてが役立つわけではない〉。3) しかるに神は、われわれの種族を共同体に向けて導き、先んじて自らの共同体へと与からせ、すべての人間に共通なものとして、自らの御言葉を供し、すべてのためにすべてを創造した。したがってすべては共有のものであり、富める者が財を自らの分であると主張することは許されないのである。したがって「わたしには財があり、余っている。どうして贅沢に耽らずにいられよう」と言う際の財は、人間のものでも共有のものでもなく、むしろ愛のためのものなのである。「わたしには財がある。どうして必要としている人々に分かち与えないでいられよう」。というのも〈あなたの隣人を、あなた自身と同じように愛し〉(マタイ19,19)、豊かにする人こそ、完全な人だからである。5) これらこそ、真の贅沢であり、宝庫に収められた豪奢である。しかるに虚しき欲情への浪費は、投資ではなく、破滅の部類に入る。というのもわたしが知る限り、神はわれわれに、使用のための権能を与えたが、それは必要不可欠なものに限られ、その使用とは共有であることを望んだのであった。6) しかるに大多数の者が飢える中で、一人贅沢をするというのは不合理である。というのも、多くの人々に善行を行うほうが、ひとり贅沢に住まうことよりも、どれほど誉れに満ちたことであろう。あるいは人々のために消費することの方が、石や金に浪費するよりも、どれほど賢明な方法であろうか。品位ある友人を獲得することの方が、非生物である装飾物を手に入れるよりもどれほど有益であろうか。田畑は、他者を喜ばせること以上に、誰に対して益することになるであろうか。

121.1) われわれには、次のような問いかけに対しても、それを解く必要が残っている。もしすべての者が、より安価なものを選び取るとすれば、高価格なものは、一体誰のためにあるのか。—それは人間のためだと言いたい。ただしそれは、執着や違和感なしに人がそれらを用いる場合においてである。だがもし、すべての人が賢慮を働かせるということが不可能であるだけでなく、必需品の必要から、容易に入手しうるものを追求せねばならないとすれば、それらの余剰物を享受することからは遠くあらねばならない。2) まず、娘のおしゃれ道具のような装身具の類なら、この世そのものを顧みない女性であれば、呪詛すべきである。というのも女性は、内的に品位ある者であるべきだし、内的に美しい女性であることを示すべきだからである。美と羞恥とは、ただ靈魂にのみ映るものである。3) それゆえ、ただ真摯な者だけが真に美しく善き人であり、

善きものだけを美であると判断する存在である。

「ただ徳だけが

肉体の美しさを通じても顕わになる」（作者不詳喜劇断片 412 コック）。

そして徳だけが肉体において花を咲かせ、品性がいわば閃光の如くに、その姿において輝きを放つとき、愛すべき節度の時宜を示す。4) 植物にしても動物にしても、個々の美は各々の徳のうちに生起するからである。しかるに人間の徳とは、正義・節制・勇気そして敬神の念である。美しいのは、富める人ではなく、正しく節度を持ち、総じて善き人なのである。5) いまや、兵士たちも金箔で身を飾りたいと欲しているが、それは次のような詩行を読んだことがなかったからであろう。

「彼は金を身につけて行軍しようとした。さながら

うら若い少女のごとくに」（ホメロス『イリアス』2.872 - 873）。

122.1) 実におしゃれ好きは、徳のことはほとんど顧慮せず、身体にもっぱら意を注ぎ、美への愛を虚栄のために退けるものであるが、これは徹底して排除すべきである。というのも身体に固有でないものを固有のものだとする錯覚は、嘘をつこうとする努力と、迷妄の習性とを生むからである。それは真摯・自然・真に無垢なものをではなく、高慢・軟弱・脆弱なものを映し出すだけである。2) しかるに彼女たちは真の美を弱め、それを金で覆い隠し、過ちがどのようなものであるかを知らず、自らに幾万の富という枷を掛けている。その様はさながら、

「異邦人の間では、

悪人が金で縛られていると言う」（作者不詳喜劇断片 413 コック）。

3) わたしには、女性たちはこの囚人たちを羨んでいるように思われる。というのも、この金の首飾りとは首枷であり、首輪とはカテテールとも呼ばれ、鎖の役割を果たすもので、アッティカ人の間ではそれこそずばり「鎖」と呼ばれているものではないだろうか。4) また、女性が見せる足まわりの無節操について、喜劇作家フィレモンは『若者たち』の中で「足首につける足枷」と呼んでいる。

「透明な衣と黄金の

足枷」（フィレモン断片 84）。

123.1) おお女性たちよ、あなたがたが羨むレッグ・ファッションとは、自らを足枷で縛って見せること以外の何であろうか。質料が非難を緩和するとしても、その情動は変わらない。わたしには、進んで鎖に身を任せる女性は、度

重なる不幸を誇っているように思われる。2) おそらく叙事詩の神話が(ホメロス『オデュッセイア』 8.266 – 366), アフロディテが姦通の場面でそのような鎖をまわっていたと述べているのも、その装束を姦淫の象徴として仄めかしているのであろう。ホメロスは、この鎖も金色であったと述べているからである。だが装身具をまわっている女性たちは、そのような悪のきわめて明白な象徴をもまったく恥じようとしない。3) エウアを蛇が欺いたように、黄金の装身具は他の女性たちをも、罠を用い、蛇の姿をとって倨傲へと狂わせる。彼女たちが海蛇や蛇を見目よく作り上げるからである。

実に、喜劇詩人のニコストラトスはこう語っている。

「鎖、カテテル、指輪、カモシカの皮、蛇、
足環、ヘリボア」(ニコストラトス断片 32)。

124.1) またアリストファネスは、『女だけの祭り』において咎めを込め、女性の化粧をすべて数え上げて提示している。ここでわたしは、この喜劇作家の言い回しそのものを引用しよう、あなた方の愚行による卑俗さに対して、正確に反駁するために。

「はちまき、バンド、
ニトロン、軽石、リボン、リング、
ヴェール、ルージュ、ネックレス、アイシャドウ、
薄絹、ヘリボア、ヘアネット、
下帯、ショール、下布、ローブ、外衣、
キトーン、懸け布、上布、フロック。
これらのうちで最大のものはまだ言ってない」。

「まだあるのかい？」

「イヤリング、石細工、耳輪、宝石、ふさ、
プレスレット、留め金、アンクレット、首飾り、
印章、鎖、指輪、パップ、
頭飾り、ガードル、皮根、赤瑪瑙、
首巻、耳飾り」(アリストファネス、断片 322.2 ; 4 – 14)。

3) わたしはもう疲れ、装身具を数え上げることに飽きた。だがわたしには、彼女たちがこれほどの重荷を負ってどうして疲れないのか、不思議に思えてならない。

125.1) おお虚ろな好奇心、虚しき虚栄心よ。彼女たちは遊女のように富を咎めの的へと浪費し、神の賜物を悪趣味へとおとしめ、悪の技巧を追い求めて

いるのだ。2) 主は福音において明白に、金庫のために貯蓄し、〈お前は何年間もの蓄えとなる多くの財を有している。食べよ、飲め、喜び騒げ〉（ルカ12,18－20）と自分に言う富者を「愚か者」と呼び、〈その夜、おまえの命は奪い取られるのだ。おまえが備えたものが、いったい何の役に立とうか〉と述べている。3) 画家のアペッレスは、ある弟子がヘレネを黄金で着飾っている姿に描いたのを見てこう言った。「おお若者よ、おまえは美しく描くことができないのか、お前の絵は富める女性だ」。いまの女性たちはそのようなヘレネであり、真に美しいのではなく、富をもって造形された姿である。

126.1) そのような女性たちに対して、聖霊はゼファニヤを通してこう語っている。〈彼らの銀、彼らの金は、主の怒りの日に彼らを救い出すことができない〉（ゼファニヤ1,18）。キリストによる訓導を受けた女性たちには、金で飾ることは相応しくなく、御言葉を通して飾るのが似つかわしい。その御言葉を通してのみ、金は映え出でるのだ。2) 古のヘブライ人たちは幸いであった。彼らは女性たちの装飾具を剥ぎ取って投げ棄て、ないし火にくべることさえできたのだから（出エジプト32,1－6）。ところが、金を鑄造して牛を作り、それを拝んでいた者たちが、その技術や企てをなじることをせず、われわれの妻たちには、贅を尽して飾り立てることを教えた。3) かくして金に対する欲情のゆえに姦淫した偶像が火にくべられて試みられる。ただ火のみによって、放縦は偶像のごとくに滅ぼされるが、真理はそれに耐え抜く。ここから御言葉は、預言者を通じてヘブライ人たちを責め、こう述べる。〈彼らは金と銀とでバアル神を作った〉（ホセア2,10; 15）。ここでバアル神とは明らかに、装飾物ということである。4) さらに、いとも明白にこう威嚇して語る。〈わたしは彼女に対して、バアル神との日々を罰しよう。彼女はバアル神のために生贅を捧げ、耳輪や首輪を身に付けた〉。そしてこのような装飾の原因を付け加えてこう述べている。〈そして彼女は愛人の後を歩き、わたしを忘れた、と主は言われる〉。

127.1) さて彼女たちは、黄金の装身具をこの悪しきソフィストのために蓄えたが、この遊女たちは、相応しき帳のために化粧に与かったり偶像崇拜したりしたのではない。2) かの至福なるペトロは、驚くべき仕方でもう述べている。〈婦人たちは、金や真珠や高価な着物を身に付けたりしてはなりません。むしろ、善い業で身を飾るのが、神を敬うと公言する婦人に相応しいことなのです〉（1テモテ2,9－10）。3) つまり使徒は、彼女た

ちが化粧から遠ざかるべきであると命じているのである。もし彼女たちが美しいのであれば、その本性だけで十分である。その本性に対して技巧で争おうとすべきではない。すなわち、迷妄は真理と競合し得ない。もし彼女たちが本性上醜悪なのであれば、本来有していないものが付加されることで、難詰されているのである。

128.1) であるからキリストに仕える女性たちは、簡素さを尊ぶのが相応しい。というのも真に、簡素さは聖性に先立ち、食欲を平らかにし、余剰物ではなくあるだけのもので必要を満たす。というのも簡素さは、その名が示すとおり、溢れ出たり重くなったり膨らんだりせず、全体が平たく滑らかで等しく、余分がなく自足している。2) 一方充全とは、本来の限度に過不足なく叶えられた状態である。その母は正義であり、自足が乳母である。この状態こそしかるべきあり方にとって充分であり、幸いなる生を叶えるには、この充全で足りるのである。

129.1) あなた方の手の実りには、聖なる秩序、善く分かち合える交わり、浄めの業が相応しい。〈なぜなら貧しき者に与える者は、神に貸すのだから〉(箴言 19,17)、また〈雄々しき者たちの手は富んでいる〉(箴言 10,4)。財を軽蔑し分かち合いに積極的な者こそ雄々しき者である、と述べているのである。しかるに脚に関しては、善行に躊躇なき俊敏さと、義に疲れを知らぬ歩みを輝かせよ。ネックレスや首飾りは羞恥と賢慮である。2) 神はそのような首飾りから黄金を抽出される。〈知恵を見出す人は幸い、叡智を見出す人は人間性をまっとうする〉と聖霊はソロモンを通じて語る。〈なぜならそれらをやり取りすることは、金や銀の宝庫よりも優れ、宝石に優る価値がある〉(箴言 3,13 - 15)。これこそ真なる装飾である。3) しかるに女性の両耳は、本性上、イヤリングや耳輪を付けるために傷つけられてはならない。本性に対して、望むことのために強いることは許されず、両耳の装飾として、聴覚のレベルにまで降りてこられた方が、真なる教えを告げるために通る以上のものはない。4) 両目は御言葉に彩られ、両耳は、感覚まで貫かれて神の言葉を聴き聖なるものを見るために備えられている。つまり御言葉は本当に、真なる美、すなわちそれ以前には〈目が見たことも、耳が聞いたこともなかったもの〉(1 コリント 2,9) を示しているのである。